

リトル・バスタード

晩  
歳仁

ドアにノックの音がしたのは、なけなしのバーボンの瓶の底に残った最後の一滴を飲み干した時だった。

時刻は午後5時半を少し回っている。

机の上のコップの水は、さっきあったばかりの地震の揺りかえしで、ゆらゆらとゆらいでいた。

男は、少し顔をしかめると、机の上に乗せた足をゆっくりおろし、言った。

「入ってくれ。鍵はかけてない」

うすい合板のドアにはまっている磨りガラス、ストラ・ダイク探偵事務所と逆文字で書いてある、を通してうつる影は女のものだった。

建てつけの悪いドアをきしませて入ってきたのは若い女だった。

小さな紙袋を抱えている。

これといって特徴のない平凡な容姿の娘だった。

ネブラスカあたりの国道ぞいのカフェで、お仕着せのエプロンをつけて働くのがおにあい、といった雰囲気、あかぬけない安物の白いワンピースに合成皮革のヒールをはいている。

「あなたがストラさん」

意外にとおる声で娘が言った。

「そうですよ。どうぞおかけください。ミス……」

「イシュカ・マイカート。イシュカと呼んでください」

そまつな身なりから考えて、金になりそうにないとふんだストラだったが、不況の影響による仕事不足で、バーボンにもことかく毎日のため、がらにもなく言葉が丁寧になった。

娘の、黒目がちでよく輝く眼に何かを感じたせいもある。

こういった第六感、彼のような仕事の者には不可欠だ。

それに、今までの経験から、こういった田舎娘の依頼は、ほとんどが、人探し

程度だから、新しいバーボンの瓶を買うために、ひと働きするのも悪くないとも考えたのだ。

「わかりました。で、ご用件は？ああ、その前に、当探偵事務所の規約を申しあげておきます。費用は一日200ドルで、諸経費は別途いただきます。あと、捜査途中に身の危険が生じるような場合は、私の判断で捜査をやめるか、あるいは危険手当を適宜いただきます。よろしいですか？」

娘は、軽くうなずいて言った。

「はい。それで結構です」

「で、ご用件は？」

「実は、私には、バクスターという兄がいるんですが、その兄が、この街に来て行方がわからなくなってしまったので、なんとか探し出して欲しいんです」

「お兄さんが、こちらに出て来られたのはいつ？」

「半年前です」

「いつから行方不明に？」

「三ヶ月前に」

「警察には行きましたか？」

「はい。でも、家出人の捜査には乗り気ではなくて……」

もちろん、そうだ。年に数千人の行方不明者を出すこの街で、本腰をいれて行方不明者をさがすほど警察はヒマじゃない。

もつとも、行方不明者が死体に変われば、話も変わってくるが。

「お分かりかと思うが、田舎ならともかく、大都会での人捜しは楽じゃない。人数が多いからね」

ストラは、いちおう渋ってみた。金はほしいが、あまり簡単にとびつくと、安っぽい探偵と見られる。それはまずい。

娘は、黙ったまましばらくうつむいた。

やがて、紙袋から封筒をとりだす。

手渡された封筒をあらためると、手の切れそうな札束が入っていた。ざっと見  
つもって、5000ドルはある。

「これは手付け金です。それに、都会は危ないと聞いていますので危険手当も入  
っています」

貧乏な探偵にとって、5000ドルの魅力は大きい。

ただの人捜しに危険などあるはずもないが、世間知らずの娘にそれを教えるか  
どうかはまた別な話だ。

ストラは、声が裏返らないように努力して言った。

「なるほど。金に糸目はつけない、ということですね。だが、私だってバカじゃ  
ない。ただの人捜しに相場の十倍を払おうというのは普通じゃない。何か事情が  
あるんでしょうね。まずは話をうかがいましょう」

「わかりました」

娘は、行儀ぎよう良く椅子にすわりなおすと話し始めた。

「私と兄はサウス・ダコタで育ちました。ラークシ・ティという町です。」

父は、かなり手広くコットン工場を経営していましたので、私たちの暮らしは  
裕福でした。私たちを生んですぐ母がに亡くなったので、私と兄は父ひとりの手  
で育てられたのです。三年前に父も死に、私と兄には数万ドルずつの遺産が残さ  
れました」

「失踪した時、お兄さんは遺産を持っていましたか？」

「兄が行方不明になってから、弁護士に頼んで預金を調査してもらいましたが、  
お金はそのままでした」

「金目当てに誘拐などされたのではない、ということですね」

娘は、紙袋から大きめの封筒を取り出して、ストラにさしだす。

「弁護士に言って、兄に関する書類を作ってもらいました。詳しくは、ここに書

いてあると思います」

「これは……」

ストラは大きな手をひろげて肩をすくめた。

「手回しがいいな」

「どうぞでしょう」

娘は背筋をまっすぐに伸ばし、ストラを見つめた。

「引き受けてくださいますか？」

「わかりました。お引き受けしましょう」

そう言って、ストラは、封筒をたしかめた。

顔をくもらせて言う。

「お兄さんの写真がないようですが？」

「兄は、たいへんな写真嫌いでしたので、ほとんど写真を撮っていないのです。

その上、家を出るときに、わずかに撮った写真も、ほとんど焼いてしまって、唯

一、手元にあるのが」

そう言って、娘、イシユカは財布をとりだし、すり切れた写真をぬき出した。

「これです。この写真は、ずいぶん前、兄が学生の頃のもので、しかもあまり写りがよくありません」

娘の差し出した写真は、ひどく輪郭がぼやけてはいたが、白黒のもようの中から、聡明そうな男の顔がなんとか判別できた。兄妹といっても似ていない。

「あずかっていいですか？」

「どうぞ」

ストラが、書類を机にしまって鍵をかけるのをみて、娘は腰を浮かした。

「では、帰ります」

「連絡は、どうしましょう？この街ではどこに滞在を？」

「まだ決めていませんが、近くのホテルに泊まるつもりです。でも、連絡は私の

方からしますので」

「わかりました。どうかご安心を。責任を持って捜索しますから……」

「いや、安心はしない方がいいぜ」

ストラの言葉をさえぎって、太い男の声が部屋にひびいた。

娘は驚き、紙袋を抱きしめる。

同時に、蹴られたように乱暴にドアが開いて、のっそりと大男が入って来た。

警官の制服を着ている。

「なんだワムスカ……」

ストラは硬い声をだした。

「まあそう怒るな」

男の顔を見て、緊張に体をこわばらせていた娘の表情も和む。

「あなたは……」

「やあ、お嬢さん」

「何だ。君たちは知り合いか？」

「なに、この方が警察に来られた時、話を聞いたのが俺だったのさ。それで、誰か警察以外に人さがしをする人はいないかって言うんで、ここを教えた」

大男は、床に転がったバーボンの瓶をひろってゴミ箱に入れると続ける。

「つまり、俺は、お前の商売を助けてやったってわけだ」

「よけいなお世話だな」

二本目の瓶をゴミ箱に捨てようとしていたワムスは、さっとストラに近づくと、勢いよく瓶を机に置いた。

ドン、と大きな音がして電話の受話器が外れる。

机の上のコップから水がこぼれた。

「一体、お前は どうしたってんだ。ノートンが死んでからってもの、警察は辞めちまうし、やっと取った探偵免許で事務所を開いても、これといった広告もなし

じゃあ……」

「関係ないさ」

外れた受話器を戻しながらストラが言った。

「いや、関係はある。俺はな、ノートンにお前のことを頼まれているんだ」

「なおさら関係ないな」

「おい、あまり突っ張るんじゃないぜ。警察はな、お前に関しちや、何かとキナ臭いウワサも嗅ぎつけてるんだ」

「そいつは光栄だな」

二人は黙ったまま睨みあった。

「それでは、私は失礼します」

険悪なムードを破って娘が言った。

立ち上がりかける娘を制してストラが言った

「待ってください。ホテルなら適当なのを紹介しますよ」

「いえ、寄るところがありますので」

「これから車で出かけようとしていたところです。送っていきましょう」

「その後は、どうせ久しぶりに入った金で、酒場に繰り出すんだろうさ。俺もついて行くぜ。紹介料だ」

「勝手にしろ」

ビルを出ると、外はすっかり暗くなっていた。

朝から降っていた雨は昼過ぎにはやみ、ビルによって切りとられた空には星が見えている。

「最近では、この街も世知辛（せちがら）くなって、路上駐車しにくくなった。こいつのような警官が、大きなワルを見逃して、小さな犯罪で小銭を稼ごうとするからだ。車は少し先に停めてある」

そうやって、ストラは歩道を歩き出した。娘がそれにしたがう。さらにワムスがそれに続く。

瓦造りのビルは、雨で黒っぽく濡れ、決して充分とは言えない薄暗い街灯が、地面の水たまりに反射して、うら悲しい気分を誘った。

雲が流れさった空には、おそらく満月がかんではいるはずだが、ビルの谷間までとはどかない。

路上に置かれた巨大なゴミ収集箱からは、紙屑が溢れ、いつもは路上に寝ころぶホームレスの姿さえも、今は目に付かない。

地震など起こったことのない、このマンハッタンで、なぜか、ここ数ヶ月頻発する地震に恐れをなして、どこかに逃げ込んでいるのだ。

もっとも、ホームレス以外の何事にもすぐ慣れてしまうニュー Yorker たちは、この二、三日、天変地異にすらあまり注意を向けなくなっている。

ここは、ロサンジェルズとは違うのだ。微震はあっても大地震など来やしない。そんな気持ちの人々から危機感を無くさせているのだろう。

さすがは、エンパイヤ・ステートビルと、クライスラービルの建つ岩盤三角州だ。

そう思ってストラは唇を皮肉っぽくつり上げた。

並んで歩きながら、自然な歩調でストラから遅れると、イシユカは警官に話しかけた。

「お聞きしていいかしら」

「何だ？」

「さっきおっしゃっていたノートンって誰なの？」

「奴の息子さ。一年前に病気で死んだ。奴はいい警官だったが、それ以来駄目になっちまった」

「奥さんは？」

「別れた女房は、確か西海岸の方で再婚したって話だ」

「つまらないおしゃべりは止してくれ」

ストラが前を向いたまま言った。

ついで口調を硬くし、

「ところで、あの妙な格好をした男たちは君の知り合いか？」

と、尋ねる。

突然、路上に降ってわいたように、六人の男の影が現れたのだった。

男たちは、着物に袴、頭には鉢金をつけ、それぞれが日本刀やクサリガマといった武器を手をしている。

と、見る間に、三人の行く手を阻むように、道いっぱいに広がった。

「どうやら、こいつらは、話に聞く日本のサムライらしい」

ストラは、二年ほど前、ノートンにせがまれて出かけたメイシー百貨店の日本展を思い出してつぶやいた。

じりじりと、すり足で包囲の輪を狭めてくる男たちを見ながら続ける。

「俺か君、あるいは警官に用があるらしいな」

「スタイルからすると、それもヤバそうな用らしい」

ワムスが楽しそうに言った。

力自慢の大男は、警察官のくせにこういう騒ぎには眼がないのだ。

「武器はあるの？」

意外に冷静な娘の声がした。

「俺は撃たれるのが嫌だから、銃は持ち歩かない主義なんだ。が、警官なら銃ぐらい持っているんだろう」

「俺も銃は嫌いさ……それに、そんな当てにならない道具より、拳の方が役に立

」

言い終わらぬうちに、男の一人刀の斬撃を放ってきた。

街灯を反射して不気味に輝く青白さから、切れ味はカミソリよりも鋭いと思われる刀の一撃を、ストラは転がって避けた。

そこへクサリガマの分銅が飛んでくる。

あわてて拾ったゴミ箱のフタで鉄塊をはじきながら、半歩下がったところへ、次の男の刀が襲いかかる。

この男たちはプロだ。

しかも、よく訓練を受けた。

「普段から、もう少し運動をしておくべきだったな」

最後に斬りつけてきた男にスーツのすそを切りさかれたストラは苦っぼく笑った。

ゆるゆると、男たちは二つのグループに分かれた。

一つ目のグループは、ストラを威嚇しながらとり囲んだ。

無言の殺気を発して斬りかかってくる男をかわしながら、探偵は鳩尾に蹴りを入れ、連携して襲ってきた男の股間を蹴り上げる。

もう一つのグループは、ワムスを襲っていた。

大男は、巨体に似合わぬ素早さで、斬りかかる男の腕をつかむと、赤ん坊の頭ほどもある拳を男の腹部にたたき込む。

背骨を不自然に曲げた男は、数メートル吹っ飛んで巨大なゴミ箱に沈んだ。

眼のはしでそれを捉えたストラは苦笑する

この現代の蛮人ともいふべき警官を敵には回したくないものだ

娘は、警官と探偵、そして壁に囲まれた安全地帯にいたが、悲鳴で二人が振り返ると、いつの間近づいたか、男の一人が娘をはがいじめにしようとしていた。

ストラは、手にしたゴミ箱の蓋を、男の顔めがけて投げつけ、ひるんだところを体当たりで跳ね飛ばした。

「どうやら、お目当ては君のようだな」

娘を背後にかばいながらストラは、通りから路地に入り込んだ。

ワムスもそれに続く。

突然、轟音と共に赤紫色の閃光が路地をおおった。

光が消えた後には、さらに二十人ばかりの武装した男たちが立っていた。

「おい、また増えやがったぜ」

ワムスが吼えるように言った。

形勢はどうみても三人に不利だ。

「やれやれ」

ストラは呟いた。

大きいため息をついて、

「俺の命が欲しいか？別に惜しくはない命だ。くれてやってもいいが、彼女を渡すわけにはいかない。もう危険手当をもらってしまったからな」

そう言った後で小さく何事かを呟く。

「なんだ？」

ワムスが言い終わらないうちに、遠くから山鳴りのような音が近づいて来て、

やがて轟音となった。

男たちの体が紫の炎に包まれる。

ニンジャたちは苦悶に身をよじりながら燃え続け、やがて手足から中央に向けて溶けるように消滅していった。

数秒後、路上にはストラ達三人の姿のみがあった。

「いったい、どうなった」

ワムスは呆然と呟いたが、最後はストラの叫びでかき消された。

「走るんだ、俺のフォードまで」

「君は何者だ？」

露地を走り抜け、車に乗り込で急発進させながらストラは娘に尋ねた。

「どうして、あんなヤバい奴らに狙われる？」

「さっき話した通りよ」

「そんなはずがないだろう。奴らは普通じゃない」

「それなら、あなたもね……普通じゃないわ」

「……」

「私も、魔法は知っているけれど、あれほど鮮やかな手並みを見たのは初めて」

「魔法……？すると噂は本当だったんだな」

後部座席でワムスが唸った。

「おかしいと思っていたのさ。ここ1年で、お前の事務所のちかくで、魔法だとか、魔術を見たって奴が、わんさかと始めやがったんだ。この科学文明の時代に魔法もないだろうと思って取り合わなかったんだ……まあ、目撃者の大半がホームレスだったり、子供だったから信用もできなかったしな」

ワムスが黙ると、イシユカが言った。

「正直に言います。先ほど、私が話したのは、ほとんどが作り事です」

言葉遣いのみならず、声までが先ほどまでとは別人のようになってる。

「だろうな」

ハンドルをあやつりながらストラは呟いた。

フォードは、今、57番街を左に折れて、フィフス・アベニューを走っている。

セントラル・パークの林が左手すぐに見える。

「でも、これからお話しすることは、信じてもらわなければなりません。なぜなら、

このままにしておく、世界が消滅してしまうからです」

「消滅？」

ストラは眉をひそめた。

「君の兄『バクスター』を探さないと、か？」

「そうです。バクスターは私の兄ではありません。彼は、世界を救う選ばれた人なのです」

娘の声は澄み、眼は薄暗がりの中で怪しく輝き始めていた。その表情は凛々しくさえある。

「世界ねえ」

ストラは呟くように言った。

「バットマンの守備範囲はゴッサム・シティだ。スーパーマンは、アメリカとアメリカン・ウェイを守る男。で、俺の守備範囲は、このニューヨーク、せいぜいマンハッタン島だけだなんだ。とても世界は守れない。この仕事は降りさせてもらおう」

「駄目よ。それは許されないわ。世界が減びたらこのマンハッタンも無くなってしまう」

割り込んできた車にクラクションを浴びせながら、ストラは言った。

「それもいいだろう。いっそのこと無くなれば……」

本当の気持ちだった。もうこの世界に未練はないのだ。

「危険手当は払ったはずですよ」

「金は返す」

「意気地なし！」

「俺を怒らせようとしても無駄だ」

そう言ったとたん、どん、屋根に音がした。

驚く間もなく、屋根を貫いて刀が車内に突き立てられる。

「何だ！」

「屋根の上に誰かが乗っています」

ストラは、ハンドルを左右に切って振り落とそうとしたが、さらに、一度、二度と屋根から鋭い刀の刃先が突き出されるため、それを避けるためにうまく運転ができない。

「！」

後部座席のワムスが、声にならないうめき声をあげ、のけぞった。押さえた左腕から鮮血がほとぼしる。

「やられたか？」

「かすただけだ」

午後八時を過ぎたばかりのフィフス・アベニューには車が溢れていたが、屋根に人間を乗せた異様な車の姿を見て、周囲の車は次々と急ブレーキを踏んだ。

あちこちで自動車がクラッシュし、炎を吹き上げる。

「よし」

このままでは、いつか刀の餌食になる、と考え、ストラは大きくハンドルを切ってセントラル・パークの生け垣にフォードを乗り入れた。

ガン、という衝撃と共に、フォードは数メートルジャンプする。

アメ車特有のおおざっぱなサスペンションのおかげで、着地後、大きく二、三度左右に揺れたものの、屋根の上の襲撃者はショックで振り落とされたようだった。

「やったか？」

ストラがつぶやく。

衝撃でサスペンションがいかれたのか、右にかしいだフォードは、フェンダーを地面にこするよう走り続けている。

しばらく公園の芝生を吹き上げながら走ったところで異変は起こった。

車が赤紫色の炎に包まれたのだ。

「ヤバイぜ。これはさっきと同じ光だ！消えちまうぜ」

ワムスが叫んだ。

「飛び降りろ！」

三人がドアを開け飛び降りると同時に、フォードはセントラル・パークの闇に飲み込まれるようにその姿を消した。

「怪我は無いか」

起きあがり、服についた草を払いながら、ストラは言った。

「大丈夫です」

イシユカもワンピースの裾を引っ張って整えながら答える。

「傷はどうだ、ワムス」

「言ったら。かすり傷さ」

言いながら、大男は上着の袖を裂いて左腕の傷を縛っていた。

すでに血は止まっているようだ。

「ひどい話だ。あのフォードは、まだローンが残っているんだ。五千ドルでは割にあわない」

「命あつての物種ってことだな。さて、これから、どうする？」

ワムスは言い、辺りを見渡した。

月が雲に隠されたのか、暗くて景色がよくわからない。

「くそ、早くパーク全部に街灯をつけて欲しいもんだ。そうすれば、夜の犯罪はもっと減る。前の選挙で、市長がそう公約するから投票してやったのに、あの嘘

つきめー！」

「わめくな」

ストラは、ワムスの大きな背中をどやしつけた。

「とりあえず、道に出てイエロー・キャブを拾おう。安全な場所へ行くんだ」

言い終わらなぬうちに、嵐のような風が吹き、雲を払い、明るい月が公園を照らし始めた。

ストラが低く唸る。

「どうやら、そもいかないらしいぜ。さっきの奴が来やがった」

公園が、暗闇のベールを取り去るように、端から明るく浮かび上がっていくと、二十メートルほど手前にひとりの男が立っていた。

網笠をかぶり、着流しの着物を来ている。

腰には、無反りの日本刀を一振差している。

和泉守兼定、通称ノサダと呼ばれる名刀だが、無論ストラにはわからない。

男はゆっくりと笠をとると、抑えた声で言った。

「無用な殺生は好まん。女を渡せ」

「嫌だ、と言っても、むりやり連れて行くんだろな」

「よく分かっている」

「お前が、親玉らしいな。さっきの奴らにも言ったが、依頼人を渡すわけにはいかないのが探偵稼業の辛いところさ」

「そうか。ならば」

じりじりと、サムライは距離を詰めてきた。

「死ね」

「やめてー！」

イシユカの声が公園に響く。

「どうして信じてくれないの、重蔵！アズサを傷つけたのは私じゃない」

「しらじらしいことを……」

男は、ゆっくりと腰を落とし、抜刀すると、刀を耳の横で垂直にかまえた。

刃先に念を塗る、と言われる馬庭念流の必殺の構えであったが、これも、ニユ

ーヨーカーのストラの知らないことだ。

両者の距離は、約4メートル、通常の刀では、まず届かない距離だ。

が、底冷えする殺気を感じたストラは、とっさにもんどり打って後ろに倒れた。信じられないことに、ストラの首のあったあたりを弓形に刀は真横に薙いでいる。

「ほう。念流弓一文字をかわしたのはお前が初めてだ」

重蔵が心なしか嬉しそうに言った。

「それは光栄だ」

へらず口をたたかきながらストラの額を汗が伝った。

ほんの偶然得で、初太刀はかわしたものの、それが続かないことが彼にはよく分かっていた。

「ストラ、よくわからんが、使えるならさっきの術を使え！」

ワムスが叫んでいる。

ストラは片膝をつくと、地面に向かって何か叫んだ。

すると、ところどころ芝生のはげた地面がモコモコと盛り上がり、人型をした木の根が飛び出した。

「呪符根人形か、無駄なことを」

重蔵の刀の一閃で、たちまち人形は四散し空中に消える。

ついで、鮮やかな手つきで刀を鞘におさめると、重蔵は空に手をかざし、数語、なにごとかを呟いて叫んだ

「雷電」

にわかにかに空に黒雲が生じ、雷鳴が轟きだすのを目にしたストラは地面にうずくまり、口中で呪文を唱える。

雷雲から稲妻が走ると、ストラの体を青白い光が取り巻いたのは、ほぼ同時のことだった。

ドーム状にストラを守った光が消えたあと、月に照らされた公園の芝生は、ストラを中心にくっきりと円状に焼き払われていた。

「どうやら、言霊（コトダマ）は五角のようだな」

重蔵がニヤリと笑う。

魅入られたように二人の男の戦いを見つめていたワムスは、いつの間にか彼とイシユカが、先ほどの黒ずくめの男たちに取り囲まれているのに気づいた。

二十人はいる。

男たちは徐々にその輪を縮めてきた。

無言のうちに、男たちは二人に飛びかかってくる。

「ようし、なるように、なれ、だ」

ワムスはかかってきた男を殴りつけた。

戦い出すと、ワムスの凶暴な肉体は、彼の信頼に応えて半自動的に行動し始める。

まず1人目の男を強靱な拳で吹っ飛ばし、2人目の男の腕を刀ごと抱きこんで叩き折った。

三人目の男の突きをかわし、首を締め上げ盾とする。

「下手に攻撃すると、こいつの命は……」

ないぞ、と言いつつ終わらぬ内に、数本の刀が突き出された。

ワムスは、盾にした男を突き飛ばして後方に倒れた。

仲間の刀で串刺しになった男の口から吹き出る鮮血を見ながら、彼は呻いた。

こいつらは、俺がいつもあしらっているただのチンピラじゃない。

こんな手合いと関わっていたら、それこそ命がいくらあっても足りないだぜ。

「さて、どうするか」

ワムスが肩で息をしながらつぶやくと、

「下がっていて」

そう言いながら、今までワムスの巨体の影に隠れていた娘が、数歩前に出て、ニンジャたちに対して奇妙な構えをとった。

おとなしいデザインのワンピースを着た娘が、居並ぶ白刃にファイティングポーズをとって対峙している光景は、どこか現実離れたものに見える。

「やめろ、君の手に負える相手じゃない」

ワムスの声に、娘は振り返らずに答えた。

「なら、あなたの手に負えるの？」

娘は前方に走った。

先頭にいた男に突進する。

斬りつけてくる白刃の下をかくぐり、男の左胸を軽く二回突いた。

一瞬、動きの止まった男を突き飛ばし、隣の男の胸も同様に叩く。

イシュカは、素早い動きで、数人の男にそれを繰り返した。

「だめだ。そんな攻撃ではやっつけられないぞ」

ワムスは叫んだ。

だが、その直後、大男は信じられない光景を目にした。

胸を叩かれた男たちは、突き飛ばされたままの格好で地面に倒れ、しばらく凍り付いたように動きを止めていたが、やがて、手にした刀で、我が胸を突き刺したのだ。

それも、二度、三度と。

とん、と、跳ねるように戻ってきた娘にワムスは尋ねた。

「あれは何だ？中国あたりの拳法か。ツボかなんかを突く」

「いいえ、もっと別なものよ。でも、恐ろしいのは……」

「何だ？」

「私の技が、ここで通用するということ」

意味不明な言葉を残し、娘は再びニンジャたちに向かって行く。

しかし、さすがに今度は男たちも容易にイシュカを近づけさせなかった。距離をおいて、手裏剣を投げつけてくる。

素早い動きでそれをかわした娘は、地面を叩くと何事か呟いた。

何かが裂けるような音が響いて、地面に大穴が開く。

男たちは、絶叫をあげながら、突然足下にぼつかりと開いた穴に飲み込まれていった。

たちまち穴はふさがる。

気がつくくと、20人以上いた男たちで、まだ闘えるのは今や三人を残すのみとなっていた。

そのころ、ストラと重蔵は、互いに術の掛け合いに疲れ、肩で息をしていた。

「無駄なことはやめろ」

重蔵は吐き捨てるように言った。

「この世界には、お前の探す男など存在しない……」

「なんだと？」

その時、遠くからパトカーのサイレンの音が近づいてきた。

「どうやら」

重蔵は刀をおさめた。

「ことが大げさになりすぎたようだ。娘は今しばらくお前に預けておこう」

重蔵の姿は闇に溶けるように徐々に薄れていった。

「さて、なぜバクスターがいらないと言うんだ？『この世界』とはどういうことだ？」

ストラは叫んだ。

重蔵は答えず、

「今日は、よく俺の術を封じた。お前の言霊(ことだま)も相当なものだ」

薄れ行く姿のまま薄く笑う。

「コトダマ？何だそれは。俺が使うのは、ただの魔術だ」

「あやかしの術、魔術、言霊、どう名付けても中身は変わらぬ。それは夢と現（うつ）の邂逅……ひとたび、術者の口から発せられた言葉は現実となる。また逢おう」

さらに重蔵の姿は薄くなり、やがて見えなくなった。

それと同時に気絶しているニンジャたちの姿も消えた。

さらにパトカーのサイレンの音が近づいてくる。

「ストラ」

振り返ると、ワムスとイシュカが立っていた。

「大丈夫か？」

「ああ、俺は大丈夫だ。この娘もな。そっちも大丈夫なようだな」

ストラが頷くとワムスが言った。

「死体は無いが闘いの跡は残っている。このまま警察に会うと説明が面倒だ、逃げよう」

「西96番街まで出て、タクシーを拾おう」

頷きあうと、二人の男と一人の娘はサイレンから遠ざかる方向に走りだした。

「これからどうするの？」

イエロー・キャブに乗り込み、ドイツ系移民らしい運転手に、苦勞して自宅の住所を伝えたストラに娘がたずねた。

「わからない。だが、どうやら、もう後には引けなくなったようだ」

脳裏には、重蔵と呼ばれている男の姿が浮かんでいる。

「じゃあ、依頼を引き受けてくれるの？」

「仕方ないさ。乗りかけた船だ。危険手当ももらっているしな」

「ありがとう」

「ただし、君が知っていることを、すべて話してくれることが条件だ。あの男とも知り合いのようだしな」

「わかりました。全て話します」

「それで、お前は どうする」

ストラは、後部座席に三人が並んで座ったため、ひときわ窮屈な思いをしている大男に向かってたずねた。

「何がだ？」

「あんな化け物たちが出てくるようでは危険すぎる。お前は、もうこの件から手を引け」

イシユカもうなずいた。

「そうね。あなたは、もう降りた方がいいわ。そして、すべてを忘れるの」

同時にそう言われて、ワムスは不機嫌な顔になった。

「なぜだ？」

「ここからは、普通の人間じゃ無理だからよ」

大男は慥然として言った。

「俺じゃ役不足ってんだな」

「そうじゃない。お前には闘う理由が無いんだ」

「お前にだって無いだろうが。理由か？面白そうだからってことじゃたりねえのか。いったい、何がどうなってるのか分からないが、とにかく、お前達と一緒にいると、退屈だけはしそうにない」

「こいつは遊びじゃないぜ、ワムス」

「どうせ、家族も係累も無い身の上だ。俺は、好きな事をやって死ぬのが望みな

のわ」

「警官を辞めることになってるか？」

「その通り」

「意外だな。お前は、警官って仕事が好きで、そいつが天職だとばかり思ってた」

友人の言葉に、ワムスは肩をすくめ、自嘲するように言った。

「いや、実を言うと、合法的に人が殴れるってのが、俺にとっての警官という職業の意義……」

ワムスは、イシユカが、底光りする、鋭いまなざしで見つめているのに気づくとそこで言葉を切り、

「とにかく俺は、もう決めたんだ」

と続けた。

無論、彼に闘う理由があった。

ワムスは、もうずっと以前に、ノートンが、死ぬ間際に残した「父さんをよろしく」という最後の願いを叶えるためには何でもする、と心に誓っていたのだ。

身内のいないワムスにとって、幼いノートンだけが親友と呼べる者だった。

年の差など関係はない。

友人の子供として、赤ん坊の頃からノートンを世話をしてきたこの大男にとって、幼くして母親と別れ、年齢のわりに大人びたノートンは、実の息子以上の存在だった。

ノートンが死んだ時、本当に精神状態が危なかったのは、ストラではなくワムスだったのだ。

だが、彼には、ストラを守るという、ノートンとの約束があった。

その約束が彼を支えたのだ。

「わかったわ。それでは、私について来て」

そう言うと、イシュカは、タクシーの運転手に、ドイツ語でミッドタウン・イースト電話局に行くように指示した。

「おい、電話局になんか行っても何にもならないぜ」

「いいの。とにかくついて来て」

数分後、三人は、電話局に到着した。

ミッドタウン・イースト電話局は、東51番街とセカンドアベニューの角に建っていた。

昼間にはぎやかな通りも、今は時刻も遅くなり、人通りも少なくなっている。

「さあ、着いたわ」

「こんなところに、何がある？」

ストラの問いかけに答えず、

「こっちよ」

イシュカは、角を曲がって表通りから裏通りに歩き出した。

電話局の裏手に回ると、半地下に降りる階段があり、その先にドアがあった。娘に続いて階段を降りたストラは、娘を押しつけてドアを開けようとした。

「駄目だ。鍵がかかっている」

どうするんだ、という探偵の視線を背に、イシュカは、

「電話局の中に入る必要はないのよ」

そういって、電話局の茶色いペンキの剥げ駆けたドアに向かって掌をあて、何か呟いた。

ドアが乳白色に輝いてゆらめきだす。

「さあ、私の後についてきて。一本道だから迷うことはないと思うけど」

イシユカは、ドアに向けて足を踏み出した。

まず手がドアに埋まり、やがて、体全体がドアの向こうに消えていく。

「お、おい」

呼びかけに答えず、娘の体はドアの向こうに消えていった。

「くそっ、行くしかないな」

そう言って、ストラも手をドアに押しあてた。

抵抗などないのかと思ったが、そうではなく、ドアにはゼリーのような軽い弾力があつた。

それに逆らって手を押し込むと、突然抵抗がなくなり、吸い込まれるように体全体がドアの中に入りこむ。

ドアの内部は経験したことのない世界だった。

まず、目に入って来るのは極彩色の万華鏡のような色の変化のみだった。

体の方は、暑さなどは何も感じないが、異様な方向に体がねじられている感じを強く受ける。

腕がぐるりと体を取り巻いているように感じたかと思うと、次の瞬間には、手と足が、まるでロープ同志を結びつけるように、考えられない角度でねじ曲げられ結びつけられているような気がした。

そんな状態のまま、激しい勢いでどこかに流されているのを感じるのだ。

いい加減、気分が悪くなった時、急にその感覚がなくなって、ストラはしっかりとした地面の上に立っていた。

あたりは真っ暗で、何も見えない。

「大丈夫？」

背後で声がした。イシユカだ。

「ああ」

振り返ったが何も見えない。

「どうしてこう暗いんだ」

「この部屋には窓がないの。ちょっと待って」

そう言うと、足音が離れて行った。

やがて、遠くでドアが開き、閉まる音がするした。

「おい、ワムス。無事か」

「うう、うむ。大丈夫だ」

くぐもった声が答える。

やがて、足音が近づき、

「もう少し待って、今は、まだ外に出られないから」

という声がした。

「あと十分くらいで外に出られると思う」

「分かった」

「その前に、あなたたちいっておくことがあるの」

あらたまった口調で、イシュカが言った。

「なんだ」

「あなたたちは、今、私の世界に来ました」

「君の世界？」

「そう。この世界で、私はもとの姿にもどったけれど、あなたたちは、私があなたたちの世界でそうだったように、少し容姿が変わっているかも知れない」

「すると、さっきまでの君は、本当の姿ではなかったのか。そう言えば声が少し違うな」

「そう。詳しいことは、あとで話すけど、とにかく、今は、そのことでショックを受けないようにしてほしいの」

「信じられん。が、もしそれが本当だとすると、俺の姿も変わっているんだな」

ワムスが、心持ち浮き浮きとした口調で言った。

声の調子が少しおかしい。

「もしかしたら、俺は、とびっきりの男前になっているかもしれないな。いや、それより、もっと小柄になりたい。体が大きいのは、ひどく不便なんだ」

「そうなのか？」

「お前みたいに6フィート程度なら問題ないだろうが、俺のように7フィート近いと既製服も少ないし、どこでも頭をぶつけちゃう。子供にはこわがられるし、夜道を歩くだけで人に怪しまれる」

「そんなものか」

「俺をこわがらなかったのは、ノートンだけさ」

その時、遠くでベルの音がした。

「もう大丈夫。今、明かりをつけるから、ちょっと待って」

すぐ近くでマッチをする音がした。

一瞬、硫黄の匂いがして、ひと呼吸おいて黄色っぽい光で部屋が浮かびあがる。まず気づいたのは、彼らは今、煉瓦造りの狭い部屋の中にいるということだった。た。

いたるところに、焼き印が押された大きな木箱が積み上げてある。

「気分はどう？」

「ああ。特に悪くない……」

ストラの声が途中で止まった。

「君は……イシユカか？」

「そうよ」

「いや、だが、君は……」

美しい、そう言いかけてストラはかろうじてその言葉を飲み込んだ。

この場で口にするのは、ひどく間抜けなような気がしたからだ。

「何でもない」

だが、事実、娘は美しかった。

淡いランプの光に浮かび上がったイシュカの姿は、まるで泡から生まれたばかりの妖精だった。

銀色に近い金髪が柔らかく波打ち、薔薇の花に似て官能的な唇はピンク色に輝いている。

そして、これだけは、先ほどまでと同じ青い瞳が、愛らしい表情の中で、きらきらと輝き、その中に宿る強い意志を示していた。

今は、古風なドレスを身にまとっているイシュカは微笑みながら言った。

「あなたは、あまり変わりないわね。珍しいことだわ」

確かに知っているけれど、まるで別人の娘から親しげに話しかけられるのは、何だか妙な感じだった。

「おい、俺の体、そんなに大きくないな」

背後で甲高い声が出た。

振り向いたストラは、驚いて目を見開いた。

「君は……ワムスカ？」

驚いたことに、あの大男は、すらりと背が高く、肩幅の広い、きれいなうなじをした……女性になっていたのだった。

「そう……だな。男としては、そう大きくはないが、女性としては、かなり大柄といえるかもしれん」

ストラに指摘されて、腕や指先を見、顔に手をやると、ワムスはうるたえた声をあげた。

「なに、女性！うおっ、本当だ！おいストラ、どうしよう」

「こういうことは、よくあるのか？」

「いいえ、私の知る限り初めて。でも、女性になると言っても、この世界だけのことだし、我慢してもらわないと」

「ということだそうだ。我慢しろ」

「しかしなあ……」

なおも困惑するワムスの背中を叩いて、ストラは促した。

「気にするなよ、ワムシー」

「勝手に人の名前を女性形にするんじゃない」

「これから外に出ます。さっきのベルは、昼休みを知らせるベルだから、今はほとんどいない。あなたたちの服は、この世界のものになっているから、黙ってついて来れば、怪しまれることはないでしょう」

「わかった」

ドアを開けて外に出ると、窓越しに差し込む陽光のために、しばらくは何も見えなくなった。

目が慣れると、そこは見渡す限り広い荷物の集積場だった。

人の姿は無い。

壁にかかった大時計は、午後1時過ぎを示していた。

「さあ、こちらへ」

イシュカのみちびくままにその建物を抜け、屋外に出ると、そこには数多くの馬車が停まっていた。

塀ごしに見える、数多くの古風なデザインの家の煙突からは、もくもくと黒煙があがっている。

「まさかここは……」

イシュカは悪戯っぽく笑いながら言った。

「ようこそ、1882年秋のロンドンへ」

呆然とする二人に、イシュカが言った

「まず、スタンフォード・ストリートのわたしの家に行きましょう。そこで詳し

いことを話すわ。ついて来て。歩いて十分ほどの距離だから」

振り返って娘は続けた。

「今、私たちの出てきた建物は、ロンドン中央郵便局よ」

イシユカを先頭に、3人はロンドンの街を歩き出した。

先頭に行くイシユカは、背筋をまっすぐに伸ばし、堂々とした態度で歩いていく。

その後を、ストラ、ワムスの順に続く。

ワムスが最後なのは、初めて着るスカートに足を取られてうまく歩けないからだ。

進むにつれ、通りは、だんだんと賑やかになり、両側に様々な種類の店が並びだした。

ストラは、通りのショーウィンドウに自分の姿を写してみる。

服装こそ黒のフロックコートという、この時代に則したものだが、容姿は、ニューヨークの頃とあまり変わっていないかった。

彼は安心するような、物足りないような複雑な心境になった。

見上げると、ロンドンの空は、晴天であるにもかかわらず、どことなく薄暗く、どんよりと曇って陰鬱な感じがした。

いたる所で落とされている馬糞を踏みそうになるから、空ばかり見ているわけにもいかない。

人通りは、さらに多くなった。

着飾った男女とすれちがったかと思うと、おそらく何日も風呂に入っていないであろう汚れた顔をした浮浪者が、靴を磨かせてくれといいながら後をつけてくる。

ロンドンの街も、彼のいた1965年のニューヨークと同じで、大都市特有の光と影の両面を持つてるようだ。

右手に大きな建物が見えてきた。

イシユカが、あれはセントポール大聖堂だと教えてくれる。

しばらく歩いた後、3人は左に折れてテムズ河を渡った。

「晴れているのに、なぜ空が曇っているように見えるんだ」

ストラは尋ねてみた。

「霧のせいよ、といたいけれど、実は、ロンドンには、家庭や工場で使われる石炭が出す黒煙にいつも覆われているの。冬になると霧と煙で10フィート先も見えないくらいよ」

イシユカは、歩いて十分程度の距離と言ったが、実際は20分以上かかった。ストラが好奇心から立ち止まればかりいるのと、ワムスの歩く速度が遅いめだった。

「ついたわ。ここで、わたしは母と暮らしているの」

イシユカの住まいは高級なアパートだった。

一階のドアを開けて階段で二階に上り、さらに突き当たりのドアを開けると居間が現れる。

「座ってちょうだい」

イシユカは、二人に椅子をすすめると、奥の扉を開けて出てきたメイドにコーヒーを持ってくるように命じた。

「アルコール抜きでいいわね。この国では、陽の高いうちから、お酒を飲む習慣はないから」

飲酒癖を皮肉られて慥然としたストラは言いかえず。

「英国人は、紅茶ばかりガブ飲みするんじゃないのか？」

「私たちは、コーヒーも紅茶も飲むわ」

肩をすくめてワムスが言う。

「帝国主義的なやり方だな。植民地から来るものなら何でもありがたがる」

皮肉な言葉も、女性となったワムスの口から発せられると迫力がない。

その言葉を聞き流してイシュカが言った。

「母に会わせたいけど、最近はずっかり体が弱っているから、今日は無理みたい」

ストラは頷いた。

「さあ、話してくれ」

コーヒーが運ばれると、ストラは切り出した。

「訳がわからないことは、もうたくさんだ」

「分かったわ」

イシュカは、窓際のソファに座ると話しだした。

「事の経緯を話すためには、まず、私の母の事から話さないと。母の職業は霊媒師でした」

「霊媒師？霊媒師って、あの世とこの世を取り持つあれか。エジソンが晩年凝っていた」

ストラが呟く。

「そう、そのとおりよ。エジソンと言う人は知らないけど」

ワムスが納得した顔で頷いた。

「そうだな、1880年と言えば、コナン・ドイルがまだシャーロック・ホームズを書かずに、貧乏のどん底の生活をしていた頃だ。まだ英国でエジソンは有名なじゃない」

ワムス、今は浅黒く美しい婦人が、男言葉で乱暴に話すのを聞くのは奇妙な感じだ。

ストラが話を受けて言う。

「ドイルも晩年、心霊を信じていたがな……続けてくれ」

イシユカは語った。

彼女は、1862年にロンドンで生まれた。

彼女が生まれた年、母親は、産業革命が成し遂げられたロンドンで、急速に必要なになった労働力、つまり紡績の女工として働いていた。

鉄道技師をしていた父親は、彼女が生まれる直前に列車事故で亡くなった。

イシユカが生まれてしばらくすると、母親は幻聴と幻覚に悩まされるようになった。

それらには、いろいろな内容が含まれていたが、決まって見るのは、見たこともない東洋の街と、自分たちの街に似ているが、もう少し科学の進んだ都市の二つであった。

「つまり俺達のニューヨークと……」

「あの柵(しがらみ)重蔵のいる1782年の京都よ」

イシユカの母も、初めのうちは幻覚を治そうとした。だが、英国の医者皆首を横に振った。

無理をして金をため、ドイツ帰りの医者にも診てもらったが、出産と育児の過労によるヒステリー症状だと言われただけだった。

時とともに、ますます二つの都市は存在感を強め、やがて彼女はその世界がどこかに実在していることを確信するようになった。

もともと感受性の強い女性ではあったが、都市の幻覚を見るようになってからは、特に靈感が鋭くなって。

イシユカが5歳になるころには、死後数日間なら死者の魂を宿して、生きている家族と話をさせることができるようになった。

噂を聞いて訪れる人の列が家のまえにできるようになると、彼女は工場を辞め、専門の霊媒師として生活を始めた。

訪れる人々に、貧富の区別なく応じているうちに、彼女の生活は裕福になっていった。

彼女は、あまり教養があるとはいえない女性であったが、自分が幻覚で見る世界を他人に理解してもらおうと、あまった金と時間で教師をやとい、様々な知識を得ることに心血をそそぐようになった。

このことは、結果的に、娘のイシユカに当時の女性の水準では考えられないほど色々な教育を与えることとなった。

イシユカは、子供の頃から母から良く二つの世界の話聞いていた。

刀、サムライ、探偵、自動車、飛行機、電話。

自分の世界にはないものに慣れ親しんで、彼女は育ったのだった。

やがて、イシユカ自信も、他の二つの世界の存在を確信するようになり、いつかは19世紀のロンドンとは違う世界を訪ねてみたいと思うようになった。

そんなおり、彼女の母は、新たな悪夢に苦しめられるようになったのだった。

「どんな悪夢なの」

と問う彼女に、母は、

「『龍』がくる夢」

と答えた。

「もうすぐ『龍』が世界をめちやくちやにして、なにもかも破壊してしまう。それを防ぐために、バクスターを探しなさい。この世界だけでなく、あとの二つの

世界も含めて」

ワムスが口をはさんだ。

「それで、バクスターってどんな奴なんだ？俺が知っているバクスターは、出世のために上司にアパートの鍵を貸す、C・C・バクスターだけだ」

「それは、この間封切られた映画の話だろう。俺もラジオシティで観たよ」

二人のニューヨーカーの軽口を無視してイシュカが答える。

「バクスターは『龍』を退治できる、ただひとりの人間なのよ。そして、彼は龍の現れる場所のすぐ近くにいと母は言うの」

「『龍』って、あの中華街で爆竹を鳴らしながら舞い踊るあれか？」

「いいえ、あんなものじゃないわ。もっと恐ろしく、途方もない力を持っている

怪物よ」

「いったいどんな力だ」

ストラの問いに、イシュカは、ぶるっと肩を振るわせて言った。

「三つの世界を混ぜ合わせる力……」

「なんだって」

「今、少しずつだけど、三つの世界が混ざりだしているの」

「混ざる？」

「そう、あなたたちの世界と私の世界と重蔵の世界」

「だが、そいつはおかしいな。俺たちのニューヨークと、このロンドン、そして重蔵の日本は、時代こそ違え、同じ地球上の場所だ。それが、どうやって混ざらんのだ？」

「混ざるといふ言い方が、本当に正しいかどうかはわからない。

でも、すでに三つの空間が完全に混じり合った場所は、何も存在しない空間になっっているの。

私と母は、そこをケイオス空間と呼んでいるわ」

「ケイオス……混沌（こんとん）、ごちゃ混ぜってことか」

「『龍』はその中を飛び回って……そして、そのたびに、ケイオス空間は少しずつ拡大しているのよ。ケイオス空間のまわりは、水に濡れた絵の具がにじむように、それぞれ隣にある世界との境界があいまいになって、そこに世界を行き来する通路ができるの。さっき通った通路もその一つよ」

「君は、今までに、何度ニューヨークに来た」

「5回くらいかしら。子供の頃から話には聞いていたけれど、いいところね、ニューヨークは。あの活気ある街は、行くとたびに何かしら新しい印象を与えてくれるわ。この件が片づいたら、ぜひ、他の場所も回ってみたい」

夢見るようなまなざしでそう言った後、イシュカは口調を変えた。

「何もかも終わったなら、ね。重蔵のいる東洋には、そもそもバクスターという名前の人物はいないようだから、最初はロンドンで捜したの。大金を出して新聞広告を出し人を雇って。でも無駄だった。バクスターはいなかった。ロンドンが駄目なら次はニューヨーク。私は、あの街に行って、いろいろな方法でバクスターを探したけれど駄目だった。」

そこで、今回、初めて向こうの警察や私立探偵を雇うことにしたの。だからロンドンの弁護士に依頼して、バクスターの資料を適当に用意させたのよ。あまり漠然とした依頼だと、受け付けてもらえないと思って」

「すると、写真も偽物なのか？」

「その通りよ」

「バクスターね。よくある名前だぜ」

「他に何か特徴はないのか？」

「ないわ。でも、会ったら分かるそうよ。私なら」

「片っ端から、バクスターという名の男を見つけ、君が会うのか？難しいな。ニューヨークには偽名を使っている者も多いはずだ」

沈黙が訪れた。

イシユカはコーヒーを飲み、異世界から来た二人は、カップを見つめて耳にしたばかりの知識を消化しようとしていた。

やがて、ストラが口を開いた。

「そのケイオス空間というのは、君の話だと3つの世界に共通に存在するようだが、俺たちの世界では、そんな空間や『龍』を、誰も見た事がない。これは、一体どういうことだ」

イシユカは、飲んでいたコーヒーカップから口を離し、答えた。

「ケイオス空間は、三つの世界で存在する場所が違うの。あなた方の世界では、ニューヨークの地下四マイル（約六・四キロ）にある」

ストラは、あやうくカップを落としそうになった。

「あの地震はそのためなのか？」

「そう」

「ということは、放っておくと、マンハッタン島そのものが、ある日、地下に陥没するということもあり得るな」

そういって、ワムスは腕を組んだが、豊かな自分の胸のふくらみに驚いて、慌てて腕組みを解く。

「そして、私たちの世界では、ケイオス空間は、ロンドン上空20マイル（約32キロ）にあるわ」

「では、あのロンドンの空……」

「そう、本当は、霧と黒煙だけが原因で、あんな空の色になっているわけではないのよ。まだ、ほとんどの人が、まだ気づいてはいないけど」

「柵 重蔵の世界では、どこにある？」

重蔵の名を聞いて、イシユカは表情を曇らせた。

「実は、彼の世界が一番深刻な影響を受けているの」

「という」と

「日本では、地上すれすれにケイオス空間ができたから」

「すれすれ……今、ケイオス空間の大きさはどのくらいだ」

「直径2マイル（3.2キロ）あまり……」

「すると、重蔵の世界では、ケイオス空間は人の目に見えるわけか？」

「それだけでなく、紫色の空間を飛び回る龍も見えているわ。人々は、終末が近づいたと奇怪な宗教にのめり込んだり、あるいは異常な散財をして破産したり、略奪行為をしたりする者も少なくない。

ケイオス空間の周辺にいと、空間が拡大した時に巻き込まれて犠牲になる人達もいる」

疑問に思っ、ストラは聞いてみた。

「奴は、君を妹の敵と言っていたが、あれはどういうことだ」

「それは、私が初めて京都に行った時の事件が原因なの」

イシユカは、突然、悪寒に襲われたように、ぶるっと肩をふるわせた。

「あの時、私は初めて龍に遭遇したわ」

「君は、龍を実際に見たのか？」

「ええ。二つの世界の接点、私たちはホワイト・ポータルって呼んでいるけど、それを越えて京都の街に入ったとたん、異様な雰囲気を感じたの。

あなたたちも気がつくようになるだろうけど、何度か違う世界を行き来していると、異世界に入った途端に、世界の空気が変わるのがわかるようになるわ。

でも、その時感じた雰囲気は、今までに感じたことのないほど不気味なものだった。

言葉で言うのは難しいけど、今思うと、あれは『死の匂い』が充満した空気だった……」

地面に降り立つと、風が渦巻き、稲妻が縦横無尽に走り回っていた。

空の色は、不気味な黒紫色だった。

うずくまって必死で強風に耐えていると、やがて風が止み、立ち上がって見回すと、周りの木々は根こそぎ倒れ、半マイル向こうには巨大なくぼみが穿たれていた。

その穴の縁に、若い女性が倒れているのが見えた。

頭から血を流している。

走り寄って抱き起こそうとすると、その女性は『だめ、来ないで』と言って、身をよじって逃れようとした。

慌てて追いかけているうちに、いつの間にか、イシユカは大勢の男たちに取り囲まれていた。

その中のひとり、リーダーと見られる男が進み出て、イシユカを押しつけ女性を抱き上げた。

「アズサ、一体どうしてこんなことに？」

すると、女性は、イシユカを指さして、

「この女が不思議な術を使って、わたしを」

そう言うなり意識を失ってしまったのだった。

「そいつが、柵 重蔵だな」

イシユカは、拳を強く握りしめて頷いた。

「私は、必死に事実を伝えようとたわ。だけど、彼は、私の言うことを信じなかった。私こそが、妹に意識不明の重傷を負わせた張本人だと思っ込んでいるのよ」  
「なるほどな」

「だから私は逃げ出した。そんな些細な事件に関わってはいられないもの。彼らは、執拗に私を追ってきたけど、その時は、何とか逃れることができたわ。当時、

日本での私の力は弱かったので、かなり苦勞したけれど」

「重蔵の本当の姿はどんなふうだ？」

思いついたようにストラは尋ねた。

「どういう事？」

「ワムスが女になったように、奴も、向こうでは俺たちが見たのと違う姿をしているのか？」

「彼は元のままの姿よ。何も変わっていない。そういえば、あなたと彼だけね。変わらないのは」

ストラが、こめかみをさすりながら尋ねる。

「他の世界に自分たちの道具は持って来られるのか？」

「道具は無理。おそらく、自分の意識だけがよその世界に転移して、その意識にあった容姿と服装が実体化するのね。あなたたちも、転移した時に、この世界の服を着ていたでしょう。どういう仕組みになっているかは、わからないけど」

「意識の実体化……すると俺の意識は女なのか？」

呆然とワムスが呟く。

しばらくしてストラが言った。

「奴らは、何か独特の方法を持っているのかも知れないな。そう考えなければ、奴らが自分自身の武器を持っている理由が分からない。まあ、いずれ奴とは再び会うことになるだろうから、その時尋ねればいいさ」

「のんきなことを言っているけど……」

「ん？」

「彼らの世界、日本のサムライは、いつも死と隣り合わせの生活をしているわ。ロンドンやニューヨークとは違うのよ。今度会ったら、彼は間違いなくあなたを殺すわ」

「なんだ、そんなことか」

ストラは硬い表情で続けた。

「俺たちのニューヨークでも、殺しや暴力は日常茶飯さ。愛するものが、次の瞬間に死んでしまうくらいよくある」

「……」

「ストラの言うとおりさ。あまり心配しなくていい。俺たちはタフだからな」

イシユカは、官能的なラインを描く腰に手をあて胸を反らして断言するワムスをしばらく見ていたが、ふっと息を吐くと言った。

「とにかく、彼には気をつけて……それで、他に質問はない？」

イシユカの問いに、ストラとワムスは顔を見合わせ、頷いた。

「今のところは、ない」

「では、今度は、私から質問させて」

「ああ」

「あなたは、いつからあの『力』を使えるようになったの？」

「1年前だな」

「ノートンが死んだからだな」

「そうだ」

「もっと詳しく教えて」

「ある古本屋で本を買ったんだ。題名は『カトマイ』だった。で、その本に書かれたことを実行すると、いろいろな術が使えるようになったのさ」

「カトマイ？」

イシユカは、部屋の隅の机に近づき、そこに置いてある、分厚く古い本を手にして戻った。表紙に「カトマイ」とある。

「これは……」

しばらく、その本に眼を通したストラは、

「クリックというのが分からないが、それ以外は、だいたい、この本に書かれた

内容と同じだな」

「すると、その本を読んで同じようにすれば、俺も魔術が使えるようになるのか？」

ワムスが期待を込めてそう言った。

「残念だけど、そうなるとは限らないわ。呪文を使うには適性が必要だから」

「が、可能性はあるな。俺もぜひ後で試してみたい」

「ところで」

ストラが口を開いた。

「君はどうやって、その本を手に入れた？」

「この家は、ある貴族から家具や蔵書付きで買い取ったの。そして、この本は、蔵書の整理をしている時に私が見つけた」

「誰の家だった？」

「前の持ち主は、前インド提督ハドリー卿の子息という高い家柄の方で、相続税を払いきれずに、手持ちの屋敷や部屋を売りに出していたの」

「なるほどな。わかった」

その言葉を待っていたように、ワムスが口を挟んできた。

「そんなことより魔法の話を教えてくれ。簡単に頼むぞ」

「いいわ。まず私から話すわ。それで、もし足りないところがあったら、あなたが補足して」

ストラが頷くと、イシユカは話し始めた。

「カトマイ」

その書は説く。

この世の中のすべてのものには、2つ名前がある。一つ目は、人間が個人を識別するために使う使う名前。

もう一つは、命令名（コマンド・ネーム）だと。

そして、それこそが、真の名前、物の本質名といっても良いものだ。

もし命令名を知れば、森羅万象、すべてのことを意のままに操ることができるのだ。

逆に、もし命令名を知られれば、その者は、他人の思いのままに操られることになる。

それゆえ、人は、まず、いかにして命令名を隠すかを覚えなければならない。

また、それに付随して、この世界には、あらかじめ世界に組み込まれる形で、

さまざまな命令名が自然にまかれている。

これを基本命令と呼ぶが、重要な基本命令を以下に示す。

まず「移動命令」これは生物、非生物に関わらず可能実行可能である。ある物体を瞬時に、移動することができる。

次に「複製命令」これは非生物のみ可。物質を複数する。

「そいつはいいな」

話をさえぎってワムスが言った。

「それを使えば、いくらでも金を作れる。何百万ドルでも」

「ああ、ナンバーが全部同じ札が、何百万枚も手に入るな」

「あ、それはいかんな」

「だが、札束にこだわる必要もないのさ。金塊なら問題はないからな」

「じゃあ、なぜ、お前はそうしなかったんだ。しけた探偵稼業なんかやめて」

大きな瞳をつり上げるようにして、ワムスが尋ねた。

その仕草は、結構うしろっばい。

「さあな」

ストラは肩をすくめて言う。

「金は楽をしてもうけるもんじゃない。そうだろう」

「お前なら、そう言うだろうな……続けてくれ」

うながされて、イシユカは説明を続けた。

「カトマイ」はこう続ける。

命令名を用いたコマンドの実行には、いくつかの制約が存在する。

非生命体に、生命を吹き込むことはできない。

故に、死者を生き返らせることはできない。

また、名前の後に、区切り言葉で区切って、特殊化の呪文をつければ、さらに複雑な命令を与える事ができる。

しびれを切らして、ワムスが尋ねた。

「漠然としすぎてるな。具体的に、あの稲妻を発生させるのはどうすればいいんだ」

「あれは、それほど難しくもない。うまく対象物を選んで、基本命令を使えばいいんだ。まず、空中の電荷を複製で増加させ、対象物の電位を下げてやる。それだけで、高い電位から低い電位に高電圧が流れるのさ」

「突然、体から火が吹き出るのは？」

「綿や化繊といった、相手の衣服の素材の命令名を使って、分子振動をあげてやる」

「随分、科学的なんだな」

ワムスが関心したように言った。

「いや、それほど科学的じゃない。ある文法にしたがってコマンドを組み立てるだけだ。一度、パターンを覚えると、思ったより簡単に使えるもんだ」

「簡単に言わないで！」

イシユカが怒ったように言った。

「ただコマンドを使える、というのと、そのコマンドを、とっさの戦いの時に使

いこなせるというのは、まるで違うわ。

静かな場所で精神を集中させて、ただコマンドを使うのでさえ才能が必要な  
よ。

まして、それを戦いの場で使える人は、ほとんどいない。だから、あなたや柵  
重蔵は特別な人間なのよ」

「君もな」

「精神を集中させれば、その『コマンド』ってやつは使えるのか」

「適性があればね」

「本当にそうなのか？俺は、最初から使えたがな」

「そんな人は、ほとんどいないわ」

「言われてみると、重蔵一味も、あいつ以外は誰も術を使わなかったぜ」

ワムスがいう。

「なあ、ストラ。俺の見るところ、お前の使う『コマンド』とイシユカの使う『コ  
マンド』は違うような気がするんだが」

「そのとおり。私の『コマンド』は、基本的にはストラさんと同じだけど、この  
ロンドンでは『コマンド』を口に出して言うより、『コマンド』を与えたい対象  
の各部位を素早く二回叩く事で『コマンド』を実行する技が有効なの」

「命令の対象を叩く？」

「そう、素早く二回叩くの。あらゆるものには命令に応じた場所があって、その  
部分を素早く叩くことで『コマンド』を発するより簡単に術を使えるわ。

そして、これは、どうも、魔法としては呪文魔法より後期のものらしいの。

他の世界では、基本的に私の『コマンド』は使えないから」

「世界によって、使える魔法が異なるのか」

ワムスが呟いた。

「でも、さっき重蔵に襲われた時に、あなた方の世界でもわたしのコマンドは使

えた。いいえ、使えてしまったの」

「使えてしまった？」

「おそらく『龍』による世界の融合化が進んで、違う世界でもコマンドが使えるようになって来ているのよ。だから、私はあなたに尋ねられた時、魔法が使えることが恐ろしいと言ったの」

「すると、重蔵の操る『言霊』もコマンドと同じと考えていいのか？」

ストラが言った。

「たぶん、そう」

「そうすると、おかしなことになる。俺たちのコマンドは、科学の知識がないと使いこなせないものだ。君は十九世紀のロンドンの人間だ。科学の知識がある。

だが、奴は、一八世紀の、しかも鎖国中の日本の人間だぞ。どうして、あれほどの術が使える？その頃の科学はそんなに進んでいたのか」

「それは……分からないわ」

「奴は、ただ、できあがった『コマンド』の組み合わせを丸暗記して使っているだけなのかも知れないぜ。誰かに教えてもらって」

「いいえ、コマンドの実行は、そんなに単純じゃないわ。さっきも言ったように、状況に応じて、細かく使い分けなければならないのよ」

「どうやら、あいつは何か我々の知らない秘密を知っているらしい。ところで、君はさっき、日本にバクスターというような人間はいない、だから調査から外す、というようなことを言っていたが、そうとは言い切れないような気がする」

「どうということなの」

「鎖国はしていても、何人かの外国人は、滞在しているはずだ」

「でも、それは龍のいる京都じゃないわ」

「あるいは、バクスターに近い名前の日本人がいるかもしれない」

「そうかしら。日本には何度か行っているけど、そんな名前の人はいない」

「ともかく、一度、京都を調べてみる必要がある」

思いついて続ける。

「それに、この間、奴は、バクスターを探すのは無駄だ、とも言っていた。あいつは何かを知っている」

カップをテーブルに置いたストラはイシユカを見た。

「重蔵のいる日本に行くか？」

「ええ、そうしましょう」

ストラとイシユカは、同時に立ち上がった。

ドアに向かって歩き出す。

娘の背に向かってワムスが泣きついた。

「おい。出かける前に、俺に男物の服を貸してくれないか」

「今のロンドンで女性が男性の服を着て歩くことはあり得ないわ。女性用の乗馬服ならあるけど」

「だったら、それを貸してくれ」

「でも、あなたのように美しい女性が、場違いな乗馬服を着てロンドンの街を歩くと目立ち過ぎるわ」

ストラは、あらためて女性化したワムスを見た。

ブルネットの髪に漆黒の瞳、美しく通った鼻筋と情熱的な唇。浅黒い肌。そして、古風なドレスが隠そうとしても隠せない美しい体のライン……

「そのままの方がいいな」

「人ごとだと思いやがって！」

ストラは、泣き言を言う友人に取り合わなかった。

「ただし、言葉使いは直せよ」

イシユカが続ける。

「それと、歩く時は外股にならずに、一本の線を歩くような感じで背筋を伸ばし

てね」

「そんな意識した歩き方なんて、生まれてからしたことがない。まあ、わかった。努力してみよう」

肩を落としたワムスは、小さい声でストラに言った。

「だが、一つ問題がある」

「何だ」

「トイレに行きたくなったら……どうする」

「重蔵の世界との接点は、船着き場なのか」

口笛を鳴らしてハンサムと呼ばれる二輪馬車を停めたストラは、イシユカが御者に告げた行き先を聞いてそう言った。

「ええ、なぜかは分からないけれど、電話局や郵便局、船着き場といった、ものが移動する場所の近くにポータルはあるの」

走り出す馬車の揺れに体をまかせながら、イシユカは答えた。

「重蔵の世界でも？」

「あの世界では、飛脚と呼ばれている原始的な郵送手段の中継所の近くだったわ」

「ヒキヤクってなんだ」

「確か、手紙を持って何十マイルも走る郵便屋のことだったな」

「人間が足で走るのか。車はまだないだろうが、どうして馬を使わないんだ」

「馬も使ったらしいが、人が走る方が多かつたらしい。それに重蔵の顔を見ただろう。なんだか知らんが、世の中の苦勞を一人で背負い込んでるといふ顔をしている。どうも日本人というやつは、楽しむより苦勞する方を好む人種らしい」

「日本のことを、よく知っているじゃないか。戦争で行ったことがあるのか」

ワムスの言う戦争とは、もちろん第二次世界大戦のことだ。

「冗談を言うな。その頃俺は、まだほんの子供だ。ノートンにせがまれて日本展に行った事があるのさ」

「メーシーのか？」

「そうだ」

「俺といっしょに行くといってたんだが、事件が起こっていけなくなったんだ」

「ノートンは、アジアが好きだったからな」

やがて、馬車が左右にしなりながら停まった。

「着いたわ」

イシュカが窓から外を見て言った。

ハンサムを降りると、水の匂いが鼻についた。

テムズ川の匂いだ、

河畔には、黒塗りの船が数隻、並んで停められ、その向かいには、船の荷物を一時預けておくための倉庫が数多く立ち並んでいる。

水夫と思しき男たちが、急がしそうに行き来し、その頭上を巨大な木箱が滑車を使って持ち上げられ、接岸された船に積み込まれている。

「こちらへ」

イシュカに案内されるまま岸壁を進み、壁に「シリアル製粉所」と書かれた倉庫の前で三人は立ち止まった。

「この場所は、君のお母さんが教えてくれたのか」

荷運び用の、大きなスライドドアの横にある小さなドアを開けながら、イシュカは答えた。

「そうよ。三つの世界のポータル全部と、その行き方もね」

倉庫の中に人気はなく、しばらく使われていないようだった。

「いっちょよ」

娘の後をついて、さらに進むと倉庫の奥に小さな扉があった。

「これが京都に続くホワイト・ポータルなの。今、通路を開けるわ」

前回と同様、イシュカが扉に掌をあて呪文を唱えると扉が輝きだした。

今回の転移は、二回目だけに、そう長くは感じなかった。

気がつくのと、ストラは粗末な小屋の中に立っていた。窓のない部屋だったが、大ざっぱな造りのせいか、板張りの壁の隙間から光がもれていて暗くはない。

「着いたようだな」

言ってみて、自分の声が、さっきより低く変わっているのに驚く。

どうやら、また容姿が変わったらしい。

「おお、今度は男だな」

大きな声に振り返ると、男が風雨にさらされて色あせた僧衣を来て立っていた。

天井に頭がつきそうだ。

「お前、ワムスカ？」

「そうだ」

「元の大きさに戻っているぞ」

その時、轟音とともに、小屋全体がぐらぐらと揺れだした。

「風よ。外へ逃げて」

後ろから女の声が叫んだ。イシュカに違いないが見ている暇はない。

扉を開けて外へ飛び出すと、横殴りの風が頬を叩いた。

前へ進もうとしても、なかなか進まない。

風にとばされそうになる。

あたりを見回した時に、異様なものが目についた。

一キロほど先の地面から、白く細長いひものようなものが空に伸び、徐々に広がってジョウゴのような形を成しているのだ。

最上部は霞んで見えない。

その、地面の上のヒモ状のものが、めまぐるしく回転運動をしながら地表のものを吸い上げつつ、かなりのスピードで近づいてくる。

竜巻だった。

ニューヨーク育ちのストラでも、竜巻の恐ろしさぐらいは知っていた。

このままでは、ドロシーとトトのように、家ごと空に吸い上げられてしまうだろう。

逃げようにも、竜巻の先端部は目前に迫っていて、走って逃げられそうになかった。

振り返ると、ワムスの大きな影の横にイシュカらしき小さな影が見えるが、風が強すぎてはつきりとは見えない。

なんとかしなければならぬが、この地でコマンドが使えるかどうかはわからなかった。

しかし……

覚悟を決めたストラは、地面に掌を当てるとコマンドを唱えた。

たちまち地面が盛り上がり、巨大な植物の根が飛び出し、ストラたちを飛び越え、弧を描いて地面に突き刺さり始める。

幾度となくそれが繰り返され、やがて巨大な木の根のドームがストラたちを覆い隠した。

やがて、あたりが轟音に包まれる。

壁に激しく風や石がぶつかる音がした。

轟音はしばらく続いたが、やがて小さくなり消えて行った。

「行ったようね」

根の隙間から外をうかがっていると、後ろから女の声が出た。

「即席のシェルターだが、なんとかもってくれたな。ケイオス空間の近くで、俺

のコマンドが使えたのは運が良かった。だが、どうして竜巻なんか発生したんだろう」

「たぶん、ケイオス空間が広がった時に周辺の空気が消滅して、空気が急に吸い込まれたせいでしょう」

「どうした？やけに言葉遣いか丁寧じゃない……」

振り返ったストラの声がとぎれる。

ワムス同様、イシュカも姿が変わっていたのだった。

今度の彼女も美しかった。

深緑色に近い色を見せる漆黒の髪はゆるく束ねられ、そこから伸びる美しい頬の線は、尖り気味のあごへと続き、ほっそりとした肩から、しなやかな手へとつながっている。

だが、もっとも印象的なのは、今度もやはり、その目だった。

大きく黒目がちの瞳は、形の良い眉と相まって神秘的な印象を与え、すっきり通った鼻筋は、高すぎず低すぎず絶妙な形に整えられている。

いま、イシュカは手足を紅の手甲、脚絆でかため、えんじ色の塗り笠と小振りな杖を手にとって地面に座っていた。

「この国では、男の方に話すときは、こういう話し方が普通です。今から慣れておかないと、怪しまれてしまいますからね」

ほんの少しつりぎみの目は芯の強さを示し、話すにつれて鮮やかに煌ききらめいていた。

「そうなのか？」

「そうなのです」

「わかった。では、シェルターを消すから離れてくれ」

ドームが溶けるように消えると、ストラは立ち上がって自分の服装調べてみた。

どうやら、彼は、旅装の侍として、この世界に転移されたらしい。

卯の花色の地の袖無し羽織を着て、呂鞞(ろざや)には蛇皮をまいた無反りの大  
小を腰にさしていた。

辺りを見渡すと、先ほど出てきた小屋は土台だけ残してなくなり、近くの森の  
木も半数以上が根こそぎ持っていかれ、残りもほとんどが倒されている。

「小屋がなくなったぜ。帰りはどうするんだ」

ワムスが心配そうな声を出した。

「大丈夫です。あの土台の扉があったところに、木を立てかければそれがホワイ  
ト・ポータルになりますから」

「見ろ、ストラ」

突然、ワムスが叫んだ。

遠くの空を指さしている。

大男の節くれ立った指が指し示す先に目をやると、そこには闇が広がっていた。  
頭上にある太陽の位置から考えて、まだ時刻は昼ごろのはずだったが、地平線  
の一角から盛り上がった漆黒のベールは、円弧を描きながら反対の地平線に落ち、  
およそ空の五分の一までが黒く塗りつぶされている。

「あれがケイオス空間か……」

ストラがそう呟くのを聞きながら、ワムスは全身に鳥肌が立つのを感じた。

体格に恵まれた彼は、これまで、めったに精神的な恐怖を感じる事はなかった。

だが、今、彼は心底恐怖を感じていた。

ここから見ただけでも、黒い何かがそこにあるのでは無くて、何も無いが故に  
黒くなっている、というのが分かるからだ。

「さて、これからどうする」

ワムスと同じ感想をもったのかどうか、落ち着いた口調でストラが言った。

「近くの宿場町に行けば、宿もあるし情報も仕入れられるでしょう」

「見知った場所か」

「ええ、なじみのお店も何軒かあります」

「よし、出かけよう。あの様子では急がないとな」

荒れ野をしばらく歩くと道にあたった。

その道に沿って、さらに二十分ほど歩くと大きな街道にでた。

そこは、様々な格好をした旅人が、多く往来していた。

振り返って見ると、あれほど巨大で恐怖を感じさせた黒い半球は、今越えて来た丘の向こうに、小さい黒い固まりとなって見えているだけだった。

「このあたりの者は、世界の異常を恐れていないようだ」

人々の表情の明るさにストラは驚いている。

「天変地異が起こっても、それを恐れる人と、慣れてしまう人の2通りがあるのです」

手にした杖に結んだ鈴を、小さく、ちりちりと鳴らして歩きながらイシユカが答えた。

「このように、平気で往来を歩いている人達もいれば、ひとところに集まって、恐ろしさにふるえて信仰にすがろうとしている人もいます」

「確かに。マンハッタンでもそうだった……それにしても」

あらためて、旅装束の娘を見遣りながら、

「この世界に来てからというものの、君の話しぶりが、だんだん時代がかったものになってきたな」

「あなたも同じような話し方ができるはずです。げんに、今、あなたはこの国の言葉を苦もなく話しておられるでしょう。ここに長く居れば居るほど、この世界に影響を受けて言葉遣いも変わるのです。早めに慣れるように心がけてください」

「わかった。多分できるはずだ。日本に転移した時に、そういった記憶が頭のな

かに植え付けられたらしいからな。しかし、覚えたことのない記憶が、頭の中からわき出てくるのは、実に奇妙な感じだ」

一時間ばかり歩くと石の道標（みちしるべ）があった。

イシュカが立ち止まる。

「もうすぐ、山羽の宿と呼ばれる宿場町に着きます。その前に、この世界での、あなたたちの名前を決めておいた方が良いと思います」

「そうだな。しかし、日本人の名前なんて、急に言われても思いつかない」

「俺もだ」

「それでは、私に決めさせてください」

イシュカは、左手の指を形の良い顎に当てて、しばらく考えていたが、

「では、ストラさんは坂本龍馬、ワムスさんは西郷吉之助と呼びます。どちらも、

100年後には知らない人がいないほど有名な人物の名ですが、この時代の人はまだその名前を知りませんから」

「いいよ。どんな名前でも」

「そうだな。それでいい」

ふたりはうなずいた。

しばらくすると、道の通りに餅や茶を供する露天が立ち始め、やがて賑やかな町が見えてきた。

「山羽の宿です。このまま私と一緒に歩いて下さい」

宿場町に入ってしばらく通りを行くと、軒先に笠が掛けてある大きな建物が見えてきた。

「はたご」とひらがなで書いてある。

建物の前まで来ると、イシュカが振り返った。

「これからホテル、旅籠に入ります。おそらく、お二人は、まだ記憶が定着して

いないでしょうから、勝手がおわかりにならないでしょう、とにかく私のする通りにしてください」

そう言い残し、旅籠の暖簾をくぐっていった。

ストラたちも後に続く。

「ごめんください」

「はい」

呼びかけに応じて出てきた男は、イシュカの姿を見ると、丁寧に腰を折り、

「これはお雪さん、お久しぶりですね」

と言った。

お雪というのが、ここでの彼女の名前らしい。

「また、お世話になりますよ。こちらは私の連れで、坂本竜馬様と西郷吉之助様」

「わかりました。おい、おその、お三人に、お水をお持ちして」

はいと応えて、奥から娘が1人、手桶に水を満たして持ってきた。

慣れた手つきで、イシュカが足を洗い始めると、ストラとワムスもそれに習おうとした。

「あ、お武家さま、私がやりますから」

おそのと呼ばれた娘があわてて、桶からストラの足を持ち上げ、まめまめしく

洗い始める。

「どうやら、この宿は、殿方の足はお女中が洗うのが売り物だったようですね」

ストラの後で、ワムスが足を洗われている時、イシュカが小声で耳打ちした。

「女性はどうするんだ」

ストラも小声で聞き返す。

「もちろん、自分で洗うのです」

「その不公平さが、よくわからんな」

「そういうしきたりなのですよ」

部屋割りは、ストラとワムスが相部屋で、イシュカは別部屋となった。

アメリカのホテルと違い、部屋は、すっきりとしていてほとんど家具がなかった。

形ばかりのロウソク立て、記憶では、それを行燈ということは知っている、が畳の上に置いてあるだけだ。

通された部屋で旅装を解いていると、イシュカがふすまを開けて部屋に入ってきた。

「さて、どうやって、重蔵と接触するかだが」

「実は、さつきから俺達の後をつけている奴がいたぞ」

ワムスが言った。

「気づいていたか？あの小柄でこめかみに火傷の跡のある男。おそらく重蔵の手下だろう。まあ、このあたりは奴のテリトリーのようなだからな」

「で、どうする？」

「待つさ。気を緩めずに相手の出方を待てばいい。ところで、イシュカ」

「お雪とお呼びくださいませ、竜馬さま。この世界では」

「では、お雪。おまえは、ここの支払いをどうしたんだ」

「それは……」

「それに、俺へ支払った五千ドルも。まさか、ワムスがいったように、偽金を作ったんじゃないだろうな」

「違います」

「俺たちのコマンドは異常な力だ。だから、なるべく他の人に影響を与えないように使わなければならない、と俺は考えている」

「わかりました。本当の事をいいます。実をいうと銀を作ったんです」

「銀？」

「この時代は、金や銀の切り売りで支払いできるんです。だから、空気中の元素

を集めて変換し、銀を作ってそれで支払いを済ませたのです」

「それで俺への支払いは？」

「あれは、ダイヤモンドを作って宝石店で売った代金です」

「宝石か……まあ、それならいいだろう」

「お堅い奴だな、お前は」

あきれたようにワムスが言った。

「何でもできるから、逆に、やってはならない事をはっきりと考えておかなければならないんだ。こんなことは、警官のお前が先に気にするべきことだろう」

「『元』警官さ。今の俺は、ただの西郷吉之助。何者かは知らんが」

「あきれた奴だ」

その夜、重蔵たちの襲撃はなかった。

翌日、朝早くに宿を発った3人は、嵐山を回って昼過ぎに京の街に入った。

これも、イシユカ、お雪のなじみの但見屋という旅籠に泊まる。

しばらくは、この宿屋に滞在することにした。

次の日から、重蔵の接触を待ちつつ、ストラとワムスは京の街をそぞろ歩いた。

ある日は、糾(ただす)の森から、深泥が池、はては叡山の麓まで山行をした。

また、ある日は、加茂川で針の無い釣り糸を垂れて道行く人と話をした。

時には、そのまま意気投合して、家まで押しかけ、騒いだあげく、女房から茶漬けを出されたこともある。そうして、二人は、噂に聞く「京の茶漬け」の意味を知ったのだった。

イシユカは密かに何事かを探索している様子であったが、尋ねても何も言わなかった。

たちまち一週間が過ぎた。

その夜、ストラとワムスは三条大路を右に折れ、西大宮大路を南下しつつ但見屋に帰ろうとしていた。

「いや、今日は酔った」

「まこと、この地の酒は極上、極上」

二人とも、すっかり言葉がこの時代のものになっている。

「おれは、酒に酔うたのではないぞ。ここの人に酔うておるのだ」

「京の人間は、冷たいとよく言われるそうだが」

「なんの、この街で冷たいと言うのなら、マンハッタンやロンドンの人間はどうなる」

「そうだ！」

「そんなことを言う奴は、一度ロウアー・マンハッタンに来てみるってんだ！」  
人が取り囲む気配を感じて、二人は口を閉じた。

いつの間にか、抜刀した男達が闇の中から現れ、二人を取り囲む輪を作っていた。  
た。

服装からみてニューヨークで襲ってきた連中に違いない。

淳和院(じゅんないん)の横門が二人の背後、すぐ近くに見えているが、この時間、門はすでに閉められているから逃げ道にはならない。

「待っていました、と言いたいところだが、せっかかない気分でそぞろ歩いていたところを邪魔しおって」

ストラの言葉にワムスも同意する。

「まったくだ」

「おぬしたち、酔っているのか」

低い声がした。

背の高い影が、輪を分けて現れる。

柵重蔵の姿を見て、二人の酔いはすっと抜けた。

もともと、アルコール度数の低い日本酒は、ジンとバーボンに馴染んだ体にはこたえないのだ。

「酔ってなどおらぬさ」

「ならばよい。まあ、酔っていても、斬る時は斬るだけだ」

「だろうな」

「まだ、お互い名乗っていなかった。俺の名は柵重蔵」

「俺の名は、坂本龍馬」

「りようま？聞かぬ名だな。それがこの世界のおまえの名か」

重蔵はゆっくりと抜刀した。

青眼に構える。

「抜け」

ストラは抜かない。

いや、正確に言うとはけないのだ。

この一週間で、今や、この世界の知識だけはじゅうぶんにあるが、剣術の勝負でアメリカ育ちの彼が、剣技の権化である重蔵に勝てるはずがない。

「今日は、術くらべはなしか」

刀の柄に手をかけず、そう尋ねる。

「まえの勝負で、術の腕は互角だったからな。今度は剣の腕で勝負するさ。さあ、潔く我が和泉守兼定の露と散るがよい」

卑怯、とストラは思わなかった。重蔵は本気だ。

いかなる方法を用いても、ストラを葬り、イシユカを手中に収めるつもりなのだ。

相当な手練れでありながら、いつも部下を連れて攻撃を加えてくるのは、その考え方の現れだ。

この国で、英国流のフェア・プレイを説いても仕方がない。

ならば……ストラは、すぐ横に垂れ下がる松の木を手折り、呪文を口中で念じた。

何も起こらない

「やれやれ」

あきらめて、刀の鯉口を切った。

それは、この世界に来た時に手にしていた刀ではなく、青江恒次(かねつぐ)の作とされる業物であった。

数日前にイシユカが手に入れ、渡してくれたものだ。

「こんなものは必要ない」

しづるストラに、

「重蔵の部下に襲われた時に必要です。今の刀だと、あなたには短かすぎるでしょうから。それに、どんな刃物でも良く切れる方が結果的に安全なのです」

確かに、今までの刀は、一般人より耳から上だけ背が高いストラには少し短かった。

常人には長すぎる二尺八寸の業物は、長さも重さもちようど手にしっくりと馴染心地いい。

「やるか」

しかたなく、ストラも刀を抜いた。

地肌が青く、沸(にえ)がつよい名刀は、ストラの手もとで、ぎらりと妖しく光を

放った。

構えると自然に平星眼になる。自分でも驚くが、そういった知識だけは、この世界にいる限り自然と備わっている。

もちろん、剣術の「極意」などわからないから、大学時代から唯一精通する格闘技のボクシングを応用した。

足を前後して立ち、体重を前3、後ろ7に配分し、次いで呼吸を整え、体をリラックスさせて、反射神経を最大限に研ぎ澄まし、相手の出方を待った。

無言の気合いを発して重蔵が飛んだ。

間合いを一気に縮めると、袈裟懸けに斬りおろしてくる。

凄まじい速さであった。

ストラの命がかりうじて助かったのは、刀の二尺八寸という長さで彼の臂力の強さのおかげだった。

刃の流れる蒼光に、反射的に持ち上げた恒次の裏鎧(うらしのぎ)で、和泉守兼定が弾かれる。

重蔵が、崩れた体勢のまま、先ほどと寸違わぬスピードで横なぎに斬りつけるのを、後ろに飛んで避けた。

そこへ突きが来た。

今度も、危うく避けたが、左肩に薄傷(うすで)を負った。

痛みはまだ感じない。

ストラにとって、これほど生きた心地がなかったのは、ハーレムの露地で銃撃戦に巻き込まれて以来のことだ。

荒い息を整えて恒次を構えなおすと、再び重蔵と対峙する。

「どうした、ストラ。例の呪文を使え」

そう叫ぶワムスも、武装した男たちに囲まれて、身動きが取れなくなっている。

だが、ストラにはどうすることもできなかった。

この世界では、ケイオス空間の近く以外、彼のコマンドは使えないのだ。  
じりじりと後退するうちに、塀まで追いつめられた。

「短い因縁だったが……死ね！」

鋭い突きがストラを襲った。後ろに下がると、刃先がさらに伸びて胸元を襲う。  
二段突きだ。

塀に当たってそのまま串刺しになる、と思った時、ストラは壁ごと後ろ向きに倒れていた。

背後の塀が崩れたのだ。

「大丈夫ですか？」

仰向けに倒れたストラに、声が降ってきた。

「お雪」

星明かりにぼんやりと娘の影が浮かんで、ストラを見下ろしている。

「お酒に溺れるから、こんなことになるんです」  
違う、と言おうとしたが、壁の穴から重蔵が出て来るのを見て慌てて立ち上がった。  
「下がっていてくれ。あいつの相手は俺がする」

イシユカは無言で、懐から茨(いばら)を取り出し、二つ折りにした。

何事か呟く。

茨は細長く伸びて、鋭い穂先を持つ槍になった。

空に投げ上げる。

槍は、空中で分裂し、激しい勢いで重蔵を襲った。

「ち、こざかしいまねを」

激しく降り続く槍の雨を、右に左に打ち落とすうちに、重蔵の周りに茨の檻が出来始めた。

たちまち、重蔵は茨に取り囲まれて、身動きできなくなった。

「コマンド遣いと戦う時は、相手に忙しく仕事をさせておいてコマンドを封じ、その間に自分の術中に陥らせることです」

イシユカは、重蔵が檻を破ろうと様々なコマンドを使うのを見て言った。

「その檻は破れない。ケイオス空間、あなた達の言う、『龍』の閨(ねや)の近くに生える茨を使っているから。それに、ケイオス空間の力を蓄えた茨を使えば、この世界でも私はコマンドが使える」

『龍』の力を浴びて育った茨か。小娘だと思って油断したか」

「随分、探したの。『龍』の波動を浴びて枯れずに育つ植物を。本当にあるかどうかは自信が無かったけど、今日、やっと見つけた」

これまで、ストラたちと別行動を取っていたのは、この植物を探すためだったのだ。

壁の穴からワムスが顔を出した。

「そっちはどうなった。俺の方は片づいたぜ」

「無事だったのか」

外を見ると十数人の男たちは、全員倒されていた。

「お前が壁ごと倒れてから、急に奴らの動きがおかしくなったんで、その間に全員やつつけたのさ」

もちろん、イシユカの細工に違いない。

イシユカは茨の檻に囚われている重蔵に近づいた。

「聞きたい事があります」

「妹の敵に何を話せというのだ」

「私はアズサさんを傷つけていません」

「嘘をつけ」

「あなたの心は憎しみで凝り固まっている。だから真実が見えないのよ」  
檻に手を掛けて、重蔵がせせら笑うように言った。

「真実が見えておらぬのは。お前たちのほうよ」

「なんだと」

ワムスが扉の穴から入り込んで来ている。

「檻の中で何を強がってる」

「あなたは、バクスターという人がニューヨークでは見つからないといいましたね」

「バクスターという人、か。それも、お前たちが真実を知らぬ証拠よ」

ワムスが檻を揺さぶった。

「いいかげんにしろ。このままだと、すべての世界が消えてなくなっちまうんだぞ」

「馬鹿なことを。『龍』は我々を新しい世界へ導いてくれるだけだ」

「新しい世界、か」

「信じる、信じないは、おまえたちの勝手だ」

「ひとつ聞かせてくれ」

「なんだ」

「この時代に生きるお前が、どうして稲妻を起こすような、複雑なコマンドを使えるんだ。あれはもつと進んだ知識が必要なはずだ」

「コマンド？言霊のことか。あんなものは簡単だ。エレキの性質を使えば良いだけだからな」

「エレキ？電気のことか」

「風来先生は、何もかもご存じだった。エレキの仕組み、言霊の使い方。『龍』のこともすべてな」

「風来先生？風来山人。でも、たしかその名は……」

イシユカが呟いた。

「知っているのか？」

ストラが問う。

「ええ。この時代の事はひと通り調べましたから。ですが、その名の方は獄中で亡くなっているはずです。今から、そう、もう何年も前に」

「亡くなられたさ。世の中に愛想を尽かされてな。だが何年も前ではない」

「今年は天明2年。西暦で言えば1782年です。風来山人が死んだのは、たしか3年前の安永8年のはず。しかも獄中で」

「先生が湿った暗い獄の中で死なれるものか」

「では、あなたが連れ出したのですね。脱獄の噂通りに」

「いったい誰なんだ？風来っていうのは」

しびれを切らしてストラが尋ねた。

「風来山人と称する本草学者は、戯作者にして科学者。またの名を福内鬼外。晩年、秋田屋九五郎を斬った咎で獄死した人物です。現世の名を平賀源内」

「ゲンナイ？知らんな」

ワムスがうなった。

「後に、この国では、知らぬ者がいないほど著名な人物です。特に、応用科学に長けていた人物でした。洋画の制作、摩擦発電器エレキテルの復元製作など」

「なるほど。それで、つじつまがあってきたな」

ワムスは納得し、

「その平賀って奴が、重蔵の黒幕ってことだ」

突如、空に一条の稲妻が走り、雷鳴が京の街を引き裂いた。

「あれは――」

『龍』よ。なぜ、こんなところに」

遠くに紫色に輝く龍が現れ、その姿を中心として暗黒が広がりつつあった。

「大変だわ、都の上に新しいケイオス空間を作る気なのよ。本格的に、世界を破壊させようとしているんだわ」

夜空の稲妻に呼応して、重蔵を囲んだ茨の檻が、脈打つように動き出した。

それを見て、重蔵は檻の中でゆっくりと鯉口をきり、抜刀した。

ぐわ、ぐわと膨れあがる動きに会わせて、重蔵が和泉兼定を一閃させると、きれいな切り口を見せて檻は寸断された。

「お前たちが、バクスターを探しているとは、とんだお笑いぐさだな」

言いながら、重蔵は檻をまたぎ越える。

「糺廃（バクスター）とは、川越藩秩父鉄山の鉄、陸中仙人山の垂鉛について、先生が大山崎あたりに埋まっていると言われた鉱石のことだ。人の名前などではない」

「鉱石？」

「秩父や仙人山の開発に失敗された先生が、秋田屋殺害の冤罪の獄から脱出されたあと、埋蔵される場所の特定に心血を注がれた鉱石だ。別名、殺龍石。もつとも、先生は一流の諧謔（かいぎやく）で糺廃と名付けられたがな」

重蔵は、檻を出る時に千切った茨をイシュカに投げつけ、コマンドを唱えた。たちまち茨が成長し、三人を取り囲む檻になる。

「しまった」

「形勢逆転、だな」

檻に近づきながら、重蔵は続ける。

「先生が、1年前に急死されたあと、わしは遺書を見つけた。それは、自分を認めなかった世の中への呪いの言葉で満ちていた」

「そんなことはないわ。平賀源内は、多くの人に認められたはずよ。『ああ 非常の人 非常のことを好み 行い是れ非常 何ぞ非常に死するや……』」

「玄白老（杉田玄白）の言葉だ。先生が伝馬町牢屋敷から脱獄されたおり、幕府が体裁を取り繕って、獄死と報じた時に書かれた」

「福内鬼外名で書いた歌舞伎『神霊矢口渡（しんれいやぐちのわたし）』に、皆は

熱狂したはずです。土用の鰻だって、皆が、昔からある風習だと思っただけ流行した……違いますか」

「よく調べたな。よその世界のおまえが」

「重蔵！」

ストラが叫んだ。

「なんだ」

「お前の『言霊』は源内の死後に覚えたものじゃないか」

重蔵は、異なことをきく、という顔をして見せ、

「先生の遺稿の中に、その記述があったのだ。『龍』現れしおり、不可思議なる力発現す、と。そして、そこには、言霊の説明と応用法が記されていた」

ストラとイシユカは顔を見合わせ、頷いた。

「その遺稿ってのは、どうやら平賀源内が書いたものではなさそうだ」

「何を言う！」

「俺たちも、体裁こそ違い、同じ書物で呪文を知ったのさ。住む世界によって表現は変わっているようだが内容はほぼ同じだろう」

「ほざけ」

『龍』は、拙者に新しい力を与えてくれた。これから三つの世界が混じり合っ  
て、新しい世界が始まる。松平定信など、今の権力者もその座を追われることになろう。先生の予言どおり新しい世界が始まるのだ」

イシユカは、茨の檻から空を指さして叫んだ。

「あなたは、あの空間で私たちが生きていけると思っているの？」

指さすその先には、徐々に範囲を拡大しながら脈動する黒紫色の空間があった。

「よく考えて、遺書ではなく、生きていた頃のあなたの先生を思い出して！」

娘の強い口調に重蔵はひるみ、

『龍』が行っているのは破壊よ。あなたの先生は破壊を望む人だったの？」

重蔵の表情が動いた。

「……」

「その人は、人が傷つくことを望んでいたの？」

「……先生は、数多くの西洋文化に接しておられながら、決して兵器の開発をされななんだ。それが、一番簡単に金と権力を得る方法だったにも関わらず……」

和泉守兼定の切っ先が、徐々に下がり始めた。

「だまされては駄目！」

背後から鋭い女の声がした。

「アズサ。どうしてここへ」

彼のすぐうしろに、青ざめた顔の娘が立っていた。

ふらふらと重蔵に近づく。

「兄者。殺して、この者達を。殺して！殺して！」

もとは美しかったであろう娘の顔は、今は悪鬼のような形相になっている。

「兄者、なぜ私の言うことを信じて下さらぬのです」

「アズサ」

重蔵は妹に近づいた。

「アズサ、おまえは、あの怪我を負ってから気が動転しておるのだ。兄と一緒に

屋敷に帰ろう」

優しく妹を抱きよせる。

「兄者」

「分かったから……」

子供に接するように頭をなでる。

その表情は、ストラたちが見たことがないほど穏やかで落ち着いていた。

「何も案ずるな」

「兄者……」

アズサは、物憂げに重蔵の胸に身をあずけ、言った。

「ヌシは役立たずだ！」

「何をする！！」

重蔵は、アズサを突き飛ばした。

押さえた脇腹の指の間から、血がしたたり落ちる。

突き飛ばされた体勢から、器用に背後にくるりと回転して地面に降り立ったア

ズサは、無表情に懐剣を両手で握り、素早く重蔵に近づいた。

首筋をめがけて斬りつける。

「よせ、アズサ」

もんどり打って地面に倒れた重蔵に、なおも娘は斬りかかっていく。

「なぜ、やり遂げない。お前が、やつらを消去しやすいように、何もかもお膳立てをしてやっているのに」

「よせ、アズサ」

「源内の奴を消去し、お前宛の遺書を造るといふ面倒なこともやってやったのに」

話す娘の声に、年老いた女の声が重なり始める。

「どうして、奴らを消してしまわないんだい。簡単なことじゃないか。お前は生まれついでの人殺しなんだよ」

しだいに娘の姿がぼやけて、老女の姿がそれに重なった。イシユカを振り向く。

「お前もお前だよ。精神疲労の母親にとりついて、詳しく教えて導いてやっているのに、おかしな男に心を奪われて……」

「お母様……」

イシユカが呆然と呟いた。

「お前にバクスターを見つけさせ、重蔵に殺させる。単純な筋書きなんだよ。簡単な方がうまくいくからね。バクスターが人間じゃなかったのは予定外だけど……」

…まあいい。ケイオス空間は増殖し始めた。もう誰にも止められないよ」

「くっ」

兼定を杖代わりにして、重蔵は立ち上がるようにした。

しかし、力つきて倒れ娘を睨み付ける。

老婆の顔は今は娘に戻っている。

「怒っているの。駄目よ兄さん。あんたに私が切れるもんかえ。今は、私が操っているけど、この世界じゃ紛れもなく、この娘はお前の妹なんだからね。あんたにや斬れっこないよ。結局はあたしが勝つんだ」

歌うようにいう。

ストラは、なんとか檻を破ろうとするが、ケイオス空間の力を受けた檻はびくともしなかった。

「でも心配しないで。もうこの世界は消える。それが嫌なの？兄さん。だったら、私を斬らないと。でも、あなたに私を斬れるかしら？大事な妹……」

突然、娘の顔が笑顔を顔に張り付けたまま硬直した。

信じられない、という顔になる。

「兄さん。なぜ」

くずおれた娘の後ろに、重蔵が立っていた。

手にした兼定は血で濡れている。

「二度と……俺を試すな」

重蔵は、ぼそりと言うと、よろめいて片膝をついた。

アズサの姿は徐々に薄くなり、やがて溶けるように消えていった。

「とんでもない女だな。悪魔だ」

「よせ、ワムス」

ストラは、友人の僧衣を引いて黙らせ、

「重蔵」

茨の檻から呼びかけた。

「これからどうする？」

重蔵は答えず、茨に近づき、裂帛(れっぱく)の気合いで二度斬りつけた。いかなる技術か、内側にいるストラ達は無傷のまま、茨の檻に大きな口が開く。

重蔵は、懐紙で拭って兼定を鞘に納めた。

「わしの腹は決まった。『龍』を斬る」

「刺された傷はいいのか？」

「いらぬお世話よ」

ワムスが肩をすくめ、

「経緯はどうあれ、目的は一致したな」

嬉しそうに白い歯を見せる。

「よし、『龍』を倒そう。そうしないと三つの世界は滅びる。今までの話から考

えると、バクスターがあれば『龍』に対抗できるらしいな」

ストラが言った。

「バクスターを手に入れなければならん」

ワムスが腕を組む。

「糞廃は大山崎にある」

重蔵が言った。

「大山崎と言えば、最初にできたケイオス空間の真ん中あたりね」

「では行くか。だが……」

ストラが、京の都に広がる暗黒空間を見上げて呟く。

「間に合うか？」

「急ぎましょう」

四人は西大宮大路を北上し、二条大路を西に走った。

空に浮かぶ巨大な無の空間のおかげで、京の街も騒然となっていた。

すでに真夜中近かったが、人々は路上にあふれ、口々に空を指さし騒いでいる。二条城まで来た時、物見のためか軽装の武士が、馬に鞭をくれて走り出してきた。

その数三騎。

重蔵は、最初の武者の足を跳ね上げ、巧みに馬から落とすと、自らが馬に飛び乗って大山崎めがけて駆けだした。

ワムスもそれに習う。

破戒僧の華麗な手綱さばきを見て、ストラが感心したように呟いた。

「そういうえば、あいつは騎馬警官をやっていた事があったな」

ストラは、三番目の馬の前に立ちふさがるとコマンドを唱えた。

と、甲冑が生き物のように動いて体を締め付け、武者は苦しみの余り馬から転げ落ちた。

「いよいよコマンドが使えるようになった」

「世界が混ざり始めているのよ」

馬にまたがって、イシユカを引き上げようとする、娘はするりとストラの前にまたがった。

「あなたは、馬に乗ったことがないでしょう」

「君はあるのか？」

「私は英国人。英国は乗馬の本場よ」

そういうと馬に鞭をくれ、猛烈なスピードで重蔵とワムスの後を追いつめた。はだけた着物から伸びて、しっかりと鞍を挟む白い太股が闇にまぶしい。

「君は着物じゃないか」

「大丈夫よ。あなたが見なければね」

「わかった」

「でも、よかった」

しばらく走った時、馬上、風に髪をなびかせながらイシユカが言った。

「何がだ？」

振り落とされないように、娘の細い胴につかまりながら、ストラが叫ぶ。

「彼が私たちの仲間になってくれて」

「そうだな」

「そして、あなたが……」

最後は風で聴き取れなかった。

「何だって？」

「なんでもないわ」

大山崎に着いた時、夜明けまでにはまだ時間があつたが、ケイオス空間は、以前遠くから見た時よりはるかに巨大になっていた。

ぼっかりと地面に開いた穴の縁から中を覗いてみたが何も見えない。底まで、

どれくらい距離があるか分からない。いや、果たして、底があるかどうかさえ不

明だ。

吹きなぶる風が、ストラの着物の裾を乱す。

風は心なしか生臭い匂いがした。

「この中に飛び込むのか？」

ワムスが唸った。

「そうだ。この中にバクスターはある」

ストラが応えた。

「では、参るか」

「待って」

飛び込もうとする重蔵を制して、イシユカはいった。

「入る前に、不可侵のコマンドを使っておくわ」

「なんだそれは？」

「私たちのプロパティを変えて、外部の変化を受け付けないようにするの。ある程度身を守れるはずよ」

娘は胸に手をあててコマンドを呟いた。

「アトリビューションの変更か。まあ、やらないよりましだな」

ストラも、ワムスに向かって呪文をとなえ、次いで自分にも同様にした。

やがて、

「行くか」

そう言うと、四人は無限の暗闇に身を躍らせた。

漆黒の闇よりもさらに暗く、濃度の濃い闇が体を取り巻き世界が暗転した。

「なんだ、ここは？」

すぐ近くで、ワムスのわめき声が聞こえた。

気づくと、まっすぐな通路が遙かに続く、奇妙な場所に四人は立っていた。

背後は行き止まりの銀色の壁になっている。

「想像していたのと違うわね」

イシユカは、輝く金髪を揺らしながらそういった。

ロンドンの顔に戻っている。

「どこかのビルの中って感じだな」

ワムスが巨体を揺すって言った。

その顔は、ニューヨークでなじみのものだ。

ストラは自分の顔に触れてみた。どうやら、容姿はもとの世界のままで、服装のみ、新しい世界に会わせて変わっているようだ。

全員、体にびったりあった黒地のツナギ姿だ。

肩と胸の部分のみ赤く装飾されている。

イシユカが指を鳴らすと、掌にユリの花が現れた。

「コマンドは使えるようね」

そういって、花の匂いをかぐと、それを髪にさした。

優しい花と対照的に硬い表情が美しい。

ロンドンの服装では分からなかったが、豊かな胸からくびれたウエスト、優し

い腰つきへの素晴らしいラインが、簡素な服装で一層強調されていた。

ストラは、イシユカから目を通路に移した。

「どうやらこの通路の先に、バクスターがあるらしい」

「気にくわないぜ」

何も障害の無い通路をあごで示してワムスが言う。

「確かに、安易すぎる。畏かもしれない」

「だとしても、行くしかあるまい」

重蔵は口中で何か呟くと、空中に現れた和泉守兼定を左手で掴んだ。

四人は歩き出した。

ストラ、ワムス、イシユカ、重蔵の順番だ。

凹凸のない、なめらかで銀色の通路は、巨大な金属の四角いパイプを連続して

作られているようだった。

数メートルおきに、通路のつなぎ目がある。

「どこまで続いているんだ」

うんざりした口調でワムスが言った。

「さあな」

ストラが答える。

重蔵とイシユカは無言だ。

同じ道が延々続いたために、時間の感覚が麻痺してくる。

いかげん、気がゆるんだころ、突然、通路の前後に隔壁が降り四人を閉じこめた。

驚く間もなく、シュツと音がして部屋の空気が一瞬で消える。

突然過ぎて、口を閉じることもできず、四人は、肺の空気をほとんど持つていかれた。

こうなるとコマンドは使えない。

ストラは焦った。

人は真空状態でも、しばらく生きられるが、長くはもたない。

ワムスは走りだし隔壁に体当たりした。

だが、手ひどく跳ね返されてうずくまる。

重蔵の刀も弾かれた。

最後に、イシユカが壁に飛びつきノックする。

壁が赤く光り、次いで白く輝き始める。

意識が薄れかけた時、壁が溶け落ちて大量の空気が流れ込んできた。

「危なかった」

「しかし、この仕掛けからすると、この先になにか大切なものがあるのは間違いないようだ」

「願わくば、それがバクスターであらんことを……」

それから、四人は何度も罨に出会った。

次の仕掛けは、床全体が消失した。

その次は、酸性の腐食剤が部屋に満たされた。

「おかしいな」

ワムスが皆の気持ちを代弁した。

「確かに。最初の仕掛けはともかく、あとの罠は、わし達の言霊をもってすれば、簡単に防げるのはわかっているだろうに、なぜ繰り返すのだ」

「そこに何か意味があるのかも知れないぜ」

次は、壁が左右から押し迫ってくる仕掛けだった。

ストラが、壁の間に黒曜石の柱を出現させて脱出する。

しばらく歩いた時、

「本当に、なんだかからかわれているみたい」

疲れた表情を見せてイシユカが言った。

ストラは、ふ、と笑って、

「花をどこかで落としたようだ」

と言った。

イシユカは、髪に手をやって、

「きつと、さっきの壁のところよ。もう腹が立つ」

「せっかく似合っていたのにな」

「そう？ありがとう」

イシユカは嬉しそうに答えたが、すぐに驚いたように叫んだ。

「あれを見て！」

十メートルほど向こうに、ユリの花が落ちていた。

イシユカの髪にさしてあったものだ。

「どうやら俺たちは、同じところをぐるぐる回っているだけらしい」

「回るたびに、同じ場所で、新しい罠を仕掛けてくるんだ」

「単純だが、巧妙なからくりだな」

「まっすぐに見える道だが、実のところ輪になっているのだろう。

そして、罫の間隔から考えて、それほど大きい輪ではない」

「道が輪ならば」

重蔵が言う。

「そう、輪ならば右の壁か、左の壁が外側になる。その向こうに何かがあるはずだ」

ストラが続けた。

「右か左か」

「左だな」

「よし左からいこう」

柵 重蔵が和泉守兼定を抜き、何か呟きながら円を描いた。

ちいん、と金属の音がして、壁に円形の切れ目がついた。

ワムスが壁を押す、がびくともしない。

「妙じやな、この壁は少なくとも九尺（約2メートル70センチ）は斬れているはずだ」

重蔵が再び斬りつけると、今度は、半球形に壁は抉れた。

二メートルほど奥まで抉られているが、まだその先に壁は続いていた。

イシユカ穴に入り込み、壁に手をあてると腐食がはじまり、ぼろぼろと壁は奥に崩れていった。

皆があとから続く。

十メートル以上掘り進んでも、向こう側には出なかった。

「どうやら、こちらは、だめ、ということか」

そう言って、皆は、もとの通路に帰り始めた。

「くそっ」

最後に残ったワムスが、穴の一番奥を、力まかせになぐった。すると、意外なことに、鈍い音を立てて、壁は崩れさった。

「何だ」

ワムスが、のぞき込むと、そこには黒紫色の空間があった。

「ケイオス空間だ」

驚いて戻ってきた三人は同時に言った。

「すると、バクスターは反対側」

突然、ケイオス空間が金色に輝き始めた。

空間をのぞき込んだワムスが叫んだ。

「おい、ヤバイぜ。『龍』が、こっちに来やがった」

「おぬしが、糺魔（バクスタル）を取ってこい」

「お前一人じゃ無理だろう」

「早く行け、ここは俺が防ぐ」

「私が一緒に残るわ」

「しかし」

「早く行け。言ったらう『龍』はわしが斬る、と」

ストラは頷くと、回廊に走り戻った。

反対側の壁に向かって呪文を唱える。

壁の表面は泡立ち、みるみる溶けていったが、それは表面だけで、あとには虹色に変化する、奇妙な壁が残った。

虹色の炎が壁になったような壁だ。

「ファイア・ウォールだな」

「この程度なら中和できる。行くぞ」

揺らめく虹色の壁に、ストラとワムスは飛び込んだ。

そこは、すべてが灰色で統一されされた部屋だった。かなり広い。背後には入ってきたばかりの虹色のドアが見えている。ずっと向こうの白い円筒のテーブルが置いてあり、その上に奇妙な陶器が置いてあった。

二人はテーブルまで走った。

まず、ワムスが陶器をつかんだ

「何だこれは」

「どうやら、クラインの壺らしい。内と外の無い四次元の壺、ということだが、よくわからん」

「へんてこな形をしているな。これが入れ物だとして、どうやって開けるんだ」

「それなら分かる。こうやるのさ」

ストラは、いきなり壺をテーブルに投げつけた。

砕ける、と思った瞬間、壺は透き通るように消え、テーブルの上には、金色に輝く銃と弾丸が現れた。

不思議なことに、その横に壺がまた出現している。

「これがバクスター？。コルトかベレッタって感じだが」

ストラは、銃を手に取って、銃把に刻まれた名前を読んだ。

「ウイルス・バスター」

ワムスが叫んだ。

「そうか、バクスターではなく、バスター（破壊者）だったんだ。どこかで情報が間違ったんだな。だが、ウイルスってのはなんだ？」

弾丸の箱には「リトル・バスタード（つまはじき野郎）」とある。

「よし、行くか」

銃を手に持ち、弾丸をポケットに突っ込んだストラは、部屋の隅に向けて走った。

思いついてテーブルに戻り、壺をワムスに放り投げる。

「持って来てくれ」

走りながら、弾丸を装填する。

全部で十発あった。

虹色の壁に飛び込むと回廊に出て、そのまま、さっきイシユカと別れた場所に走る。

ケイオス空間に通じる穴の前には、誰もいなかった。

「どこに行ったんだ」

ワムスが叫ぶ。

「決まっているさ」

そう言って、ストラは虚無の空間をのぞき込んだ。

どれくらい離れているか分からないが、遠くで『龍』が踊るように飛び回っているのが見えた。

「あそこにいるようだ」

そう言って銃をスライドさせ、薬室に弾丸を送り込むと、

「壺をくれ」

と言った。

「大丈夫か」

クラインの壺を受け取りながら、ストラは精悍に笑った。

「弾丸(リトル・バスタード)を、全弾、あの『龍』に打ち込んでやるさ」

壁の裂け目から、中に入ったとたんストラは落下し始めた。

落下とは言ったものの、感覚が麻痺していて、本当に落ちているかどうかはわからない。

試しに、呪文で重力のパラメータを変更してみると、速度が鈍り進行方向を変

えることができた。

行きたい方向の引力を増加させればよいのだ。

これで、この空間を自由に移動できる。

ストラは、高速で『龍』に近づき、額の中心に向けて五発撃ち込んだ。

さらに、目に向けて三発撃つ。

しかし、打ち出された弾丸(リトル・バスタード)は、すべて『龍』の体に、弾き返された。

「だめだ。われわれの武器や言霊は、奴には効かぬのだ」

遠くで、重蔵が叫ぶのが聞こえた。

「今のがバクスターなの？駄目よ。あの化け物には効かないわ」

圧倒的な力の差を見せつけられて、イシユカの言葉も沈んでいる。

どうする……ストラは自問した。

「まずは、やるさ」

再び『龍』に挑みかかった重蔵の和泉守兼定が『龍』の角に弾かれ、根元から折れた。

イシユカの繰り出すエネルギー球は『龍』に吸収されている。

『龍』は、恐ろしいエネルギー体だった。

あの外殻を破らないことには、弾丸(リトル・バスタード)を内部に撃ち込む事はできそうにない。

我々の力より力の強い『龍』の力。

この世界の最高の力。

この世界の……だったら、この世界のもので無ければ……。

突然、ストラは理解した、なぜ、ウイルス・バスターがクラインの壺に入っていたかを。

「重蔵！イシユカ！！」

ストラは、二人を呼び寄せた。

「なにか方法があるの？」

「できるかどうかわからないが、この壺を、さっきの重蔵の刀に変化させてくれ。おそらく、三人の力をあわせないと無理だと思う」

「分かったわ」

三人は、それぞれに、壺に呪文を唱えだした。

壺はなかなか変化しなかった。

『龍』は、異変に気づいて突進してくる。

壺が徐々に、和泉守兼定に形を変えだした。

ただし、美しい透明ガラスのような材質の和泉守兼定だ。

「まだだ」

巨大な『龍』は、恐ろしいスピードで近づいてきた。

「もう少し」

『龍』の姿が眼前に迫った時、ストラが言った。

「よし、これで、あの『龍』を斬ってみてくれ」

「承知！」

重蔵は、迫り来る『龍』の前足をかすめて、胸元に飛び込んだ。

片腕を爪にかけられ、血しぶきが飛ぶ。

だが、重蔵は、そのまま『龍』の胸に近づくと、気合いと共に横に薙ぎ払った。

耳をつんざくような声で『龍』が吼えた。

重蔵の斬った傷跡から、きらきらとガラス片のようなものが流れだす。

「いまだ、胸の傷に弾丸(リトル・バスタード)を撃ち込め」

遠くから、三人の戦いを見ていたワムスが叫んだ。

ストラは、構えた銃を中心に、独楽のように回転しながら『龍』に近づいて行った。

『龍』がエネルギーを放った。

衝撃波が彼を襲う

ぎりぎりまで近づいた時、ストラは、『龍』の胸からまき散らされている白いものの正体に気づき、背筋が寒くなった。

それは、氷でできた数字だった。

『龍』は、血のかわりに、数字をまき散らして苦しんでいるのだ。

何者だ、お前は……だが、これで終わりだ。

心でそう呟き、ストラは最後の一発を発射した。

撃ち出された弾丸(リトル・バスタード)は、『龍』の直前で、金色に輝く鳩になり、胸の傷に飛び込んで行った。

「おお」

重蔵は呻いた。

「源内先生！」

「どういことだ」

「平賀源内の号は鳩溪なの」

鳩が『龍』胸に突き刺さった瞬間、すべては黄金色に輝き、次いで暗転した

それから、どれぐらい時間が経ったか、ふと気づくと、先ほどとよく似た、どこまでも続く回廊に四人は倒れていた。

はるかかなたから、何かがちらにやって来る。

最初は豆粒のようで、形状も定かで無かったが、近づくにつれ、それが巨大なスクリーンであることが分かった。

スクリーンは、四人の前までくると、音もなく停止した。

やがて、スクリーンが明滅し、乱れた画像が映り始める。

何度か正常に戻ろうとするが、なかなかうまく映らない。

「何なんだ」

ワムスが文句を言った。

しばらくすると、ぼんやりと、やがてはつきりとした映像が映りだした。

ストラたちが着ているのと同じ服を着て、男が頭を抱えながら話している。何かの記録映像のようだ。

「もう、うんざりだ。毎日毎日、兵器の開発ばかり。自分の人生に飽き飽きしてきた。このままでは気が狂いそうだ。ああ、イシユカ。愛しいイシユカは地下都市で、無事にいるだろうか？三日前も敵機の来襲があったと聞いているが……」

画面が切り替わり、さっきの男が部屋を歩き回りながら、興奮して話している。

「昨日、面白いことを思いついた。神になるんだ。世界の創造だ。右手で生き物を殺す兵器の開発をするなら、左手で新しい世界を創造すればいい。

そうすれば、魂の帳尻はあう。

数は、そうだな、三つだ。三つ世界を作ろう。

私には英、米、日の血が混じっているから、ロンドン、ニューヨーク、それに京都にしよう。

時代はコンピュータ・エイジ以前がいいな。

18世紀と19世紀、それに20世紀にするか……」

画面が乱れて切り替わった。

「すべてを最初から作るのは大変だから、それぞれの世界を、先日の歴史実験でエミュレートしたMS-DOSとWINDOWSとUNIXのオペレーティングシステムの上に作ろうと思う。我ながら良い考えだ。

これなら、三分の一の労力で世界を造れるはずだ。それぞれの時代の情報は、いくらでもデータベースにある。本物以上の世界になるはずだ……」

画面が再び乱れた。

「ただ見ているのも面白くないから、自分のDNAから抽出した性格パラメータ

を元に、私の分身を日本で生活させる事にした。地球に置いてきた愛犬ワムスのデータも擬人化しよう。

そうだ、ノートンも生活させよう。大事な弟だからな。それに、あいつはワムスのお気に入りだし。あと……イシユカのデータを黙って使うと彼女は怒るかな」

暗転。再び、嬉しそうな男の顔がスクリーンに映り、話し始める。

「順調だ。どの世界も活気に満ち溢れている。エネルギーがありすぎて、小さなイザコザが起こり始めた。これからは、文化の進化に歯止めをかけなければならぬだろう。異常な野心を持つ者は、自動的に短命に終わるようにするつもりだ。局長みたいな権力の権化は、僕の世界にはいらぬ。戦争は現実だけでたくさんだ」

次に映ったのは、不安げな男の顔だった。

「まずいな、少しプログラムが大きくなりすぎた。メイン・システムの兵器開発を圧迫し始めている。しかたない。演算速度は少し落ちるが、この世界をサブ・システムの方に移動することにする」

突然、音が大きくなった。警報が鳴り響いている。

「2108年5月8日、午前3時58分、敵の攻撃を受けた」

敵のステルス・パルスのジャマーが、ステーションを直撃したようだ。

今までうまく見つからずに来たんだが、悪運は続かなかったようだ。

これより、メイン・システムの兵器開発データを脱出ポッドにダウン・ロードして脱出する」

画面が一瞬暗転して、再び明るくなる。

「だめだ、強力なコンピュータ・ウイルスを外部から直接メイン・コンピュータに打ち込まれてしまった。あつというまにポッドのコンピュータもやられた。先月開発したLH580なら何とか対処できるかもしれないが、攻撃が続いてい

危険だ。とにかく脱出して、手で地球に着陸する。幸運を祈ってくれ」

男は、画面から消えかけて、再び戻って来て言った。

「コンピュータ。今までの記録をアーカイブして地球に送信」

スクリーンが暗転する。

後には静寂が残った。

誰も、何も言わなかった。今知った事実が四人の心に重くのしかかっていたのだ。

映像の中で使われる聞き慣れない言葉が、なぜかすつと自然に理解できた。

おそらく、この場所では、本来、制約される知識がそのまま備わっているからだろう。

「ありがとうございました。あなたがたのおかげで、ウイルス・プログラムは駆除されました」

突然、奇妙に人間離れた声が部屋に響いた。

「誰だ？」

「私は、地球と月の間に浮かぶ、全長20キロ、全幅12キロの実験ステーションのサブ・システムです。メイン・システムは、551年前に停止しました」

ストラが口を開いた。

「今の話だと、俺たちは、プログラム上のデータに過ぎないのか」

「その通りです。あなた方は、ある技術者が作り出したプログラム上で生活しています」

「さっきの男だな」

「そうです。彼の名前は、ジェームズ・サブタ。日英米の血を引く兵器開発部のチーフでした」

「あの『龍』は、ウイルス・プログラムだったのね」

イシユカが言った。

「なぜ、あんなものが俺たちを襲ったんだ？」

重蔵が尋ねる。

「流星が原因でした」

「流星？」

「メイン・システムが静止してから550年後に、流星が偶然ステーションを直撃し、その衝撃でメイン・システムが一部復旧したのです。

復旧したメイン・システムは、直ちにバックアップシステムを立ち上げようとなりました。

もちろん、メイン・システムの大部分は破壊されてしまったから、すぐにシステムはダウンしましたが、そのわずかな時間に、メイン・システムに残っていた『龍』ウイルスが、サブ・システムに進入してきたのです」

無機的な声が話し続けた。

「それは不幸な事故でしたが、幸運もありました。ウイルス・プログラムとしては、完全無欠だった『龍』ですが、メイン・システムが立ち上がった時間が短すぎて、すべてをサブ・システムに送り込む事ができなかったのです」

「もし、完全な『龍』が進入していたら……」

イシユカが尋ねた。

「一瞬で、すべての世界はなくなっていたでしょう。」

それでも、メイン・システムと違い、貧弱な防衛システムしか持たないサブ・システムにとって、『龍』は脅威でした。

システムは、ウイルスを駆除する補助プログラムとして、UNIX内に、データベースを参考にして平賀源内というキャラクターを作り出しました。

本来なら、彼が、メイン・システムのデータバンクから、プログラムLH58

0、通称『ウイルス・バスター』をダウン・ロードするはずだったのです。

システムの動きを察知した『龍』は、巧妙にも日本の指導者を操作して、結果的に歴史にそったやり方で平賀源内を抹殺しました。

しかし、『龍』にも予測がつかない事が日本では起こっていました。

「源内先生に、俺という弟子がいたことか……」

柵重蔵が呆然と呟いた。

「そうです。平賀源内は、それと知らぬうちに、サブタのDNA情報を受け継ぐ柵重蔵という弟子に、自身の使命を受け継がせていたのです」

「俺たちが魔法を使えたのは、なぜだ？」

「ウイルス・プログラムによる軽度のシステム破壊で、今まで禁止されていたシステム・コマンドを、内部データである、あなた達が使えようになったのです。

システム・コマンドは、あなた方の世界のそれぞれのシステム、MS-DOS、WINDOWS、UNIXの命令に則したものでした。

狡猾な『龍』ウイルスは、あなた方のコマンド使用能力を見抜くと、コンピュータ内部からの破壊をあなた方に手伝わせようとなりました。

『龍』は、親しい者になりすまして、あなたたちに近づいたのです」

「母さん……」

イシユカが胸の前で手を握りしめた。

「アズサ」

重蔵も呻くように呟く。

「なぜ、ウイルスが龍の形をしていた？」

ストラが訊いた。

「あれは、当時、人類が戦っていたエイリアンの姿です。

実際、エイリアンはエネルギー体だったのですが、彼らは、地球人とコンタクトをとる時は、いつもあの姿を使っていました。何か象徴的な意味があったのか

もしれません」

「地球上の人類はどうなった？」

「わかりません。ただ、過去五百年のあいだ、地球からはいかなる電波も放射されていません。また、放射能等の生活活動の痕跡もありません。

これから推察すると、地球上の人類が絶滅した確率は98パーセント以上です」

「つまり、俺たちが唯一の人類の文化遺産ってわけだな」

ストラは自嘲気味に言った。

「俺たちは、これからどうなる」

「今までと何も変わりません」

「変わらない？」

「破壊された街を復元し、あなた方をそこへ戻します。レジィ・マイカートと柵アズサも、ウイルスに冒される前の状態に戻し、すべては元通りになります」

「元通りか……」

ストラは呟き、

「それも良いだろう。だが、ひとつだけ頼みがある。この馬鹿げた術の使い方や、

『龍』に関して起こった事件の記憶を俺の頭から取り除いてくれ」

ワムスも激しく頷いて叫んだ。

「俺も頼む。俺が犬のデータを元に造られているなんて、覚えていたくない」

イシユカも頷く。

「それに、俺たちが、機械の中の夢のような存在で、その機械が宇宙に浮いているなんて事実は知らない方が幸せだ」

「それがしも、そう願う」

「ただ、進歩の規制はやめてくれ」

ストラは力強く言った。

「もし、何かの手違いで、俺たちが俺たち自身を滅ぼしても、それは運命さ。ウイルス・プログラムにやられるのとは違う」

コンピュータは、しばらく黙っていたが、

「わかりました。システム復旧後は、あなた方の世界を完全に独立させ、今までのような規制をはずして、独自の歴史を歩むようにします」

「頼む」

「では、これからあなた方を元の世界に戻します。その後、余裕をみて三十分後に記憶を消去します。」

戻られてから、何か要求があれば、その間におっしゃってください。どこでもわたしはそれを聞くことができます」

コンピュータが沈黙すると、それまで黙りこんでいた重蔵が、振り返ってストラの肩を掴んだ。

「お別れだな」

ストラが言った。

「残念だ。お主とは勝負をつけたかったが」

重蔵はそう言い、

「師の最後の願いを叶えてくれたお主を斬る訳にもいかぬ」

「決着をつけるまでも無い。俺の負けさ」

重蔵は、拳でストラの肩を軽く突くと、イシュカに近づいた。

短く言う。

「すまぬ」

イシユカは、その言葉を制するように手を挙げた。

「言わないで」

イシユカは、にっこりと笑って続ける。

「だって、あなたは、もっと、ふてぶてしくないと……」

重蔵は、初めて見せる晴ればれとした表情で言った。

「お前は、本当に良い女じゃな」

イシユカをストラに向けて、軽くとんと押し、

「よし、戻してくれ」

と言う。

一瞬後、柵重蔵の姿は無かった。

彼は日本に帰ったのだ。

ストラは、重蔵に押されて近づいたイシユカの手をとった。

あらためて握ると、思った以上に小さく可憐な手だった。

「よくやったな、イシユカ。この手で、君は偉大な仕事を成し遂げた。三つの世界を救ったんだ。おめでとう」

「あなたたちのおかげよ」

「ロンドンに帰っても、母親と元気で暮らすんだぞ。まあ、こんな事を言っても、どうせ、忘れてしまっただろうが……」

イシユカの口が、何事が告げようとして開かれ、言葉を発せぬまま閉じられた。

「さようなら、イシユカ」

ワムスが言った。

「さようなら、ワムス。そして、さようなら、ストラ」

イシユカの青い瞳は、一瞬曇ったように見えたが、すぐに彼女は背筋をまっすぐ伸ばし、はっきりした声でコンピュータに告げた。

「戻してちょうだい」

光が走った。

次の瞬間、イシユカの姿は無かった。

彼女は行ってしまった。

それは、一瞬にして永遠の別れだった。

ストラは、イシユカの消えた空間をしばらく眺めていたが、ワムスに振り向くと軽く頷き、スクリーンに向かって言った。

「俺たちが最後だな。じゃあ、元の世界に戻してくれ」

言い終わると同時に、ストラとワムスは、探偵事務所に立っていた。

転がったバーボンの瓶を蹴飛ばして、ストラが言う。

「終わったな」

「ああ、終わった」

「どうだ、一杯？」

「どこに酒があるんだ？」

「とっておきの一本の場所は、母親にも教えるなと親父に言われたもんさ」

そう言いながら、机の横の板壁を拳で叩くと板は簡単に外れ、その後ろの窪みにバーボンの瓶が一本立っていた。

戸棚からグラス二つ取り出し、袖で拭ってバーボンを注ぐ。

無言のまま、二人は酒をあおった。

「いいのか」

ワムスが、ぼそりと言う。

「何がだ？」

「とぼけるな。イシユカのことだ」

「彼女がどうした」

「気づいていただろう。彼女、お前と一緒に残りたがってたぜ」

「どこに残るんだ。ケイオス空間にか？それとも、ここか？俺は酔いどれ探偵さ。このニューヨークの片隅をはいずり回って生きていく。彼女は、この世界の俺にふさわしくない。だからと言って、お上品なロンドン俺の好みじゃない。あるいは京都なら……」

「京都なら……か」

「日本は良かったな」

「ああ、最高だった」

「よし、乾杯だ」

「京都に！」

「日本に！」

グラスが鳴り、二人の喉が鳴った。

無言の祝宴が続いた。

「だが、俺は一体なんだったんだろう」

「何だ？」

「お前や重蔵、イシユカやノートンは、データの出所がはっきりしていた。だが、俺は何者でもなかった。俺は誰だ？」

「さあな。だが、人は皆、そう思って生きていくものだろ。それに、俺みたいに犬のデータだと分かるよりいいんじゃないか。案外、お前は、サブタの買っていたネコのデータだったりするかもしれない。記録に残っていないだけでな。それより不思議なのは、なんで俺だけがコマンドを使えなかったか、ということだ……ん、どうした？」

呆然とした表情のストラに気づいてワムスが言った。

「いや、なんでもない」

だが、彼は、今、ワムスの言葉で気づいたのだ。

コンピュータは、ウイルスが親しいものに化けて、コマンド遣いに近づいた、といった。

イシユカや重蔵たちコマンド遣いは、皆サブタの関係者のパラメータを使ったキャラクターだ。

たぶん、そういった「強い」キャラクターの持ち主だけがコマンドを使ったのだろう。

ワムスだけは、犬だったからコマンドは使えなかった。

そう考えれば、ニューヨークにおける本当のコマンド遣いは、ノートンでなければならぬ。

ノートンのそばにいたのは誰だ？自分だ。

つまり、自分こそウイルスが作り出したキャラクター、重蔵におけるアズサ、イシユカにおける母レジイの役割だったのだ。

だが、ノートンは死んだ。

死んではならない重要なキャラクターが死んだ。

おそらくは、ウイルスによるバグが原因だったのだろうが、それを補うためにシステムは「無意識」に、近くにいた自分にノートンの属性をコピーしたのだ。

コマンド書「カトマイ」は、彼がノートンに渡すために手に入れたものだったろう。

つまり、彼はノートンと、ウイルスが作り出したキャラクターとのハイブリッドだったのだ。

ある意味、彼はもつともこの世界の住人らしい住人なのだ。

イシユカが自分にひかれたのは、本来恋仲になるべき重蔵との仲をアズサがじやましたからかもしれない。

ストラは目を閉じて、死んだノートンを想い、イシユカを想い……これで良か

ったのだ、と胸の中でつぶやいた。

俺は、ひとりで生きるべきなのだ、と。

だが、記憶の中の彼女は、なぜか悲しそうな顔をしている。

バーボンの残りが少なくなった頃、ワムスが時計を見て言った。

「もうすぐ三十分が経つな。俺は、これから署の方に回ってみるよ」

「そうか」

「じゃあな」

「ああ、またな」

ストラは、しばらくワムスが去ったドアを見ていたが、やがて、勢いよく瓶に残ったバーボンを飲み干した。

約束の三十分が経った。

ドアにノックの音がしたのは、なけなしのバーボンの瓶の底に残った最後の一滴を飲み干した時だった。

時刻は午後五時半を少し回っている。

ストラは、少し顔をしかめると、机の上に乗せた足をゆっくり降りし、言った。

「入ってくれ。鍵はかけてない」

薄い合板のドアにはまっている磨りガラス、ストラ・ダイク探偵事務所と逆文字で書いてある、を通して写る影は女のものだった。

ドアを開けて入ってきたのは若い女だった。それも、すこぶるつきのいい女だ。

事務所の淡い光に浮かび上がったその姿は、まるで泡から生まれたばかりの妖

精だった。銀色に近い金髪が柔らかく波打ち、薔薇の花に似て官能的な唇はピンク色に輝いている。

そして、青い瞳が、愛らしい表情の中できらきらと輝き、その中に宿る強い意志を示していた。

「あなたがストラさん」

よく通る声で娘が言った。

「そうです。ようこそ、ミス……」

「イシユカ・マイカート。イシユカとお呼びください。あなたが秘書を探しておられると聞いてやってまいりました」

そんな予定はないし、そんな余裕もない、と、喉まで出かかったが、口をついて出た言葉は、まったく別なものだった。

「まあ、お掛けください。お話を伺いましょう」

何かが始まる予感がした。

了